（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第85輯

# 野々井遺跡

近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

1994

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第85輯

# 野々井遺跡

近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

1994

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

野々井遺跡遠景（西から）

野々井遺跡その３全景（西から）

野々井遺跡その４全景（西から）

野々井遺跡その５全景（北西から）

# 序　　文

堺市の南部、泉北丘陵地域には数多くの埋蔵文化財が残されています。我が国最古で最大の須恵器窯跡群である陶邑窯跡群をはじめ陶器千塚古墳群や檜尾塚原古墳群、縄文時代の西浦橋遺跡や小阪遺跡などが知られています。

このような泉北地域を、関西国際空港の主要アクセスの一つである近畿自動車道松原すさみ線が通過することとなり、大阪府教育委員会では路線内にある遺跡の取扱いについて関係者と協議を重ね、調査について万全の体制で臨むべく、格段の努力をしてきたところであります。

本書は近畿自動車道松原すさみ線建設に先立つ発掘調査のうち、堺市野々井に所在する野々井遺跡の調査報告書であります。発掘調査は大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が現地調査を担当し、本書に報告されているような貴重な成果をあげることができました。これも関係各位に多大の御協力をいただいた結果であり、深く感謝している次第であります。

今後とも、大阪府教育委員会の文化財保護行政に御理解と御協力をいただきますようお願いいたします。

平成６年５月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　田　中　　宏

# 序　　文

大阪府の南部、堺市野々井に所在する野々井遺跡は、かつて実施された泉北ニュータウンの造成工事によって新たに発見された遺跡であります。泉北丘陵には我が国を代表する須恵器窯跡群が分布していますが、他にも数多くの埋蔵文化財が分布しています。野々井遺跡の周辺にも、初期須恵器製作遺跡である大庭寺遺跡、野々井西遺跡などがあります。

本書で報告する野々井遺跡は、近畿自動車道松原すさみ線建設に先立って発掘調査を実施したものです。当協会は、近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う調査を継続的に実施しており、野々井遺跡も昭和63年から平成５年にかけて６次にわたり21,000㎡余を調査しました。その結果、従来知られていなかった古墳１基のほか溝や土坑、中世の掘立柱建物などを発掘しました。本書が泉北地域の歴史の解明の一助となれば幸いです。

調査を実施するにあたって、日本道路公団大阪建設局、堺市教育委員会、地元各位には何かと御協力いただきました。調査を完遂することができましたのは、これら関係各位の御協力の賜物と深く感謝しております。今後とも、当協会の調査事業に御理解と御協力を賜りますようお願いいたします。

平成６年５月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　　岩　井　幹　郎

# 例　　言

1．　本書は、近畿自動車道松原すさみ線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、堺市野々井に所在する、野々井遺跡第３・４・５（その３・４・５）次の発掘調査報告書である。

2．　調査は、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．　発掘調査は、野々井遺跡その３（平成３年度）が1992年2月3日～3月25日、野々井遺跡その４（平成４年度）の調査は1992年4月3日～6月30日、野々井遺跡その５（平成４年度）の調査は1992年4月28日～10月31日で実施した。

4．　発掘調査及び整理の担当者は、以下の通りである。

　野々井遺跡その３　当協会第１班　岡戸哲紀

　野々井遺跡その４　当協会第１班　田中龍男

　野々井遺跡その５　当協会第１班　亀田　学（現、熊本県教育委員会）

5．　発掘調査にあたっては日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会、堺市野々井自治会、堺市野々井水利組合、近畿道堺南インターＪ．Ｖ工事所（本体工事奥村組・大本組共同企業体 草野千加良、山木康雄、山中　彰、猪木康之氏）などの地元関係各位の協力を得た。

6．　本書の挿図の方位は座標北、標高はＴ．Ｐである。

7．　調査で使用した地区割り方法は、財団法人 大阪府埋蔵文化財協会が国土座標第Ⅵ系を基準に設定したものである。４ｍ区画の呼称、文中の記号については当協会の発掘調査規程にしたがっておこない、詳細は第Ⅰ章の第２節で一括して示した。

8．　本書で用いた色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』 第７版(1987年)の色片との比較で記載している。

9．　遺構写真撮影は各担当者の責任でおこない、空中写真・測量は株式会社国際航業・パスコがおこなった。遺物の写真撮影・焼付けは当協会資料班小倉　勝、加茂幸彦が担当した。

10．　本書の執筆・挿図・図版作成は各担当者がおこない、野々井その５については一部田中が補助した。本書の編集は田中が担当した。

# 野々井遺跡その３・４・５

# 発掘調査報告書目次

１・序文

２・例言

３・目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過……1

第１節　調査に至る経緯……（田中）1

第２節　調査の経過と方法……（田中）2

第Ⅱ章　位置と環境……（岡戸）4

第Ⅲ章　調査の成果……8

第１節　野々井遺跡その３の調査……（岡戸）8

第１項　調査概要……8

第２項　基本層序と包含層の遺物……10

第３項　遺構と遺物……12

第２節　野々井遺跡その４の調査……（田中）15

第１項　調査概要……15

第２項　基本層序と包含層の遺物……15

第３項　遺構と遺物……21

Ⅰ．古墳時代……21

Ⅱ．中世以降……23

第３節　野々井遺跡その５の調査……（亀田・田中）　28
第１項　調査概要……　28
第２項　基本層序と包含層の遺物……　29
Ⅰ．丘陵部……　29
Ⅱ．斜面……　32
Ⅲ．自然流路……　37
Ⅳ．その他の包含層の遺物……　41
第３項　遺構と遺物……　43
Ⅰ．古墳時代後期……　43
Ⅱ．鎌倉時代……　54
Ⅲ．室町時代……　78
Ⅳ．江戸時代以降……　83

第Ⅳ章　まとめ……（田中）　86

# 挿　図　目　次

第１図　野々井遺跡位置図……　1
第２図　調査区地区割略図……　2
第３図　調査区地区割模式図……　3
第４図　野々井遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）……　5
第５図　野々井遺跡第３・４・５次（その３・４・５）調査地点（1/6,000）……　7
第６図　野々井遺跡その３遺構配置概略図（1/400）……　9
第７図　斜面部第Ⅴ・Ⅵ層出土遺物（1/4）……　10
第８図　野々井遺跡その３北側断面図（縦1/20・横1/50）……　11
第９図　13・33－ＯＯ平面・断面図（1/20）……　12
第10図　１－ＯＳ、33－ＯＯ出土遺物（1/4）……　13

第11図　包含層出土遺物１（1/4）…… 16
第12図　包含層出土遺物２（1/4）…… 16
第13図　野々井遺跡その４遺構配置概略図（1/400）…… 17～18
第14図　野々井遺跡その４断面図（1/80）…… 19～20
第15図　４－ＯＳ出土遺物（1/4）…… 21
第16図　４－ＯＳ平面・断面図（1/400・1/40）…… 22
第17図　１－ＯＷ出土遺物（1/2）…… 23
第18図　２・５～10・14・16－ＯＳ断面図（1/40）…… 23
第19図　12・13－ＯＯ、15－ＯＰ、18－ＯＸ平面・断面図（1/40）…… 24
第20図　11－ＯＯ平面・断面図（1/40）…… 25
第21図　11－ＯＯ出土遺物（1/4）…… 25
第22図　17－ＯＸ平面・断面図（1/80）…… 26
第23図　野々井遺跡その５主要遺構配置図（1/1,200）…… 28
第24図　丘陵部（整地土）断面模式図…… 29
第25図　第２・３層出土遺物（1/4）…… 30
第26図　第４・５・６層出土遺物（1/4）…… 31
第27図　斜面第１・２層出土遺物（1/4）…… 33
第28図　斜面第３層出土遺物（1/4）…… 34
第29図　自然流路及び周辺断面図（1/80）…… 35～36
第30図　自然流路第４Ａ層出土遺物（1/4）…… 38
第31図　自然流路第４Ｂ層出土遺物１（1/4）…… 39
第32図　自然流路第４Ｂ層出土遺物２（1/4）…… 40
第33図　自然流路北側肩部出土遺物（1/4）…… 42
第34図　包含層出土石器（1/2）…… 42
第35図　古墳時代主要遺構配置図（1/800）…… 43
第36図　1001－ＯＧ主体部出土鉄器（1/2）…… 44
第37図　1001－ＯＧ主体部出土遺物（1/4）…… 44
第38図　1001－ＯＧ墳丘平面図（1/100）…… 45～46
第39図　1001－ＯＧ墳丘断面図（1/60）…… 47～48
第40図　1001－ＯＧ主体部平面・立面図（1/20）…… 49

第41図　1001－ＯＧ墳丘上部遺物出土状況（1/20）…… 50
第42図　1001－ＯＧ墳丘内出土遺物（1/4）…… 51
第43図　1002－ＯＯ平面・断面図（1/40）…… 52
第44図　1002－ＯＯ出土遺物（1/4）…… 52
第45図　1003－ＯＯ平面・断面図（1/40）…… 53
第46図　鎌倉時代主要遺構配置図（1/800）…… 54
第47図　1004・1014－ＯＢ平面・断面図（1/60）…… 55～56
第48図　1028－ＯＢ平面・断面図（1/60）…… 58
第49図　1035－ＯＢ、1068・1069－ＯＯ、南側拡張部平面・断面図（1/60）…… 59
第50図　1046・1058・1061－ＯＦ平面・断面図（1/60）…… 61～62
第51図　1065－ＯＯ平面・断面図（1/80）…… 63
第52図　1066・1067－ＯＯ平面・断面図（1/40）…… 64
第53図　1066－ＯＯ出土遺物（1/4）…… 64
第54図　1071－ＯＳ土師器小皿出土状況（1/10）…… 65
第55図　1071－ＯＳ上層平面・立面図（上1/80・下1/20）…… 67～68
第56図　1071・1072－ＯＳ平面・断面図（1/80・1/40）…… 69～70
第57図　1071－ＯＳ出土遺物１（1/4）…… 71
第58図　1071－ＯＳ出土遺物２（1/4）…… 72
第59図　1072－ＯＳ出土遺物（1/4）…… 73
第60図　1073・1074－ＯＳ平面・断面図（1/80・1/40）…… 74
第61図　1073－ＯＳ上層出土遺物（1/4）…… 75
第62図　1077－ＯＳ、1201－ＯＰ平面・断面図（1/50）…… 77
第63図　1077－ＯＳ出土遺物（1/4）…… 77
第64図　1097－ＯＳ、1079～1081－ＯＺ平面略図（約1/300）…… 78
第65図　1097－ＯＳ出土遺物（1/4）…… 79
第66図　耕作地畦畔断面略図（1/40）…… 80
第67図　1082・1083－ＯＯ平面・断面図（1/40）…… 80
第68図　1078・1085－ＯＺ平面略図（約1/300）…… 81
第69図　1084－ＯＯ平面・断面図（1/40）…… 82
第70図　1086－ＯＳ平面・断面図（1/40）…… 83

第71図　1086－ＯＳ出土遺物（1/8）…… 83
第72図　1087－ＯＷ平面・断面図（1/40）…… 84
第73図　1088～1090・1202・1203－ＯＳ平面・断面図（1/400・1/40）
谷部北側平面・断面図（1/400・1/80）…… 85

# 写真図版目次

巻頭図版１　上　野々井遺跡遠景（西から）
下　野々井遺跡その３全景（西から）
巻頭図版２　上　野々井遺跡その４全景（西から）
下　野々井遺跡その５全景（北西から）

図版１　上　野々井その３　調査区全景（南から）
下　〃　北側土層断面
図版２　上　野々井その３　13－ＯＯ全景（北から）
下　〃　33－ＯＯ全景（北から）
図版３　上　野々井その４　第１調査区航空写真（西から）
下　〃　第１調査区全景（東から）
図版４　上　野々井その４　第１調査区南側土層断面
下　〃　第１調査区西側土層断面
図版５　上　野々井その４　４－ＯＳ全景（東から）
下　〃　４－ＯＳ土層断面（南から）「第16図4－ＯＳ平面・断面図Ｃ－Ｄ間畦」
図版６　上　野々井その４　１－ＯＷ付近全景（東から）
下　〃　１．２－ＯＳ全景（北から）、２．７－ＯＳ全景（南から）
３．10－ＯＳ全景（北から）、４．12・13－ＯＯ全景（南から）
図版７　上　野々井その４　第２調査区航空写真（南から）
下　〃　第２調査区全景（南から）

図版８　上　野々井その４　４－ＯＳ全景（南から）
　　下　　〃　　４－ＯＳ土層断面（北から）
図版９　上　野々井その４　４・16－ＯＳ、17・18－ＯＸ全景（西から）
　　下　　〃　　17・18－ＯＸ全景（西から）
図版10　上　野々井その５　第１調査区航空写真（西から）
　　下　　〃　　第１調査区全景（北東から）
図版11　上　野々井その５　1001－ＯＧ全景（北西から）
　　下　　〃　　1001－ＯＧ全景（東から）
図版12　上　野々井その５　1001－ＯＧ主体部全景（西から）
　　下　　〃　　1001－ＯＧ主体部遺物出土状況
　　（１.北から、２.西から、３.南から、４.北東から）
図版13　上　野々井その５　1002－ＯＯ全景（北から）
　　下　　〃　　1003－ＯＯ全景（南東から）
図版14　上　野々井その５　1004・1014－ＯＢ全景（北から）
　　下　　〃　　1028－ＯＢ全景（北から）
図版15　上　野々井その５　1035－ＯＢ全景（北から）
　　下　　〃　　１.1017－ＯＰ（東から）、２.1021－ＯＰ（南東から）
　　３.1019－ＯＰ（北から）、４.1027・1019－ＯＰ（西から）
図版16　上　野々井その５　1046－ＯＦ全景（西から）
　　下　　〃　　1067－ＯＯ全景（東から）
図版17　上　野々井その５　1068・1069－ＯＯ全景（西から）
　　下　　〃　　1071－ＯＳ全景（東から）
図版18　上　野々井その５　1071－ＯＳ遺物出土状況（東から）
　　下　　〃　　1071－ＯＳ遺物出土状況（１～３.南から、４.北から）
図版19　上　野々井その５　1073・1074－ＯＳ全景（南西から）
　　下　　〃　　1077－ＯＳ全景（西から）
図版20　上　野々井その５　1078・1085－ＯＺ全景（北から）
　　下　　〃　　1079－ＯＺ全景（北から）
図版21　上　野々井その５　1080－ＯＺ全景（北東から）
　　下　　〃　　1081－ＯＺ全景（南東から）

図版22　上　野々井その５　1082・1083－ＯＯ全景（西から）
　　下　　〃　　1084－ＯＯ全景（北から）
図版23　上　野々井その５　1085－ＯＺ全景（西から）
　　下　　〃　　1086－ＯＳ全景（東から）
図版24　上　野々井その５　1087－ＯＷ全景（西から）
　　下　　〃　　1087－ＯＷ木器出土状況（北から）
図版25　上　野々井その５　谷部土器出土状況（１.南東から、２～４.西から）
　　下　　〃　　谷部土層断面（西から）
図版26　　野々井その３　出土遺物
図版27　　野々井その４　出土遺物
図版28　　野々井その５　出土遺物
図版29　　野々井その５　出土遺物
図版30　　野々井その５　出土遺物
図版31　　野々井その５　出土遺物
図版32　　野々井その５　出土遺物
図版33　　野々井その５　出土遺物
図版34　　野々井その５　出土遺物
図版35　　野々井その５　出土遺物
図版36　　野々井その５　出土遺物
図版37　　野々井その５　出土遺物
図版38　　野々井その５　出土遺物
図版39　　野々井その５　出土遺物
図版40　　野々井その５　出土遺物
図版41　　野々井その５　出土遺物

# 付　図　目　次

付図１.　野々井遺跡その３・４・５全体図（1/400）

# 第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

## 第１節　調査に至る経緯

野々井遺跡は大阪府堺市の南部に位置する。1965年代に造成された泉北ニュータウンの光明池地区の造成工事に先だって、実施された調査によって発見された遺跡である。

当初の調査は丘陵上の桃山台団地開発に伴う調査で、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が検出されている。今回の調査は、近畿自動車道松原すさみ線が野々井遺跡北西側の谷部分に計画されたため、大阪府教育委員会の指導のもとに（財）大阪府埋蔵文化財協会が建設に先だって試掘調査を実施した。

第１図　野々井遺跡位置図

試掘調査は1987（昭和62）年２月に、道路建設予定地内の堺市大庭寺地区から野々井地区の約３㎞にかけて、約100ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した。

試掘調査の結果、道路建設予定地内の谷部にも縄文時代後期～中世の遺構・遺物が検出された。特に野々井地区では弥生時代の土器や木製品が数多く出土した。

この試掘結果を受けて、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局が再度協議を行い、大阪府教育委員会の指導のもと（財）大阪府埋蔵文化財協会が1988（昭和63）年から調査を実施することとなった。調査は第１次調査から第６次調査まで実施され、第１次調査は1988（昭和63）年７月～1989（平成１）年３月、第２次調査は1990（平成２）年７月～1991（平成３）年３月、第３次調査は1992（平成４）年２～３月、第４次調査は1992年４～６月、第５次調査は1992年４～10月、第６次調査は1992年６月～1993（平成５）年３月で、全ての調査面積を合わせると約21,730㎡の調査を実施した。

今回の調査報告書は1991～1992（平成３・４年度）年に実施した野々井遺跡第３・４・５次調査（その３・４・５）である。

## 第２節　調査の経過と方法　（第２・３図）

今回の報告書で取り上げる調査地点は計３ヶ所（第２図参照）にわたる。

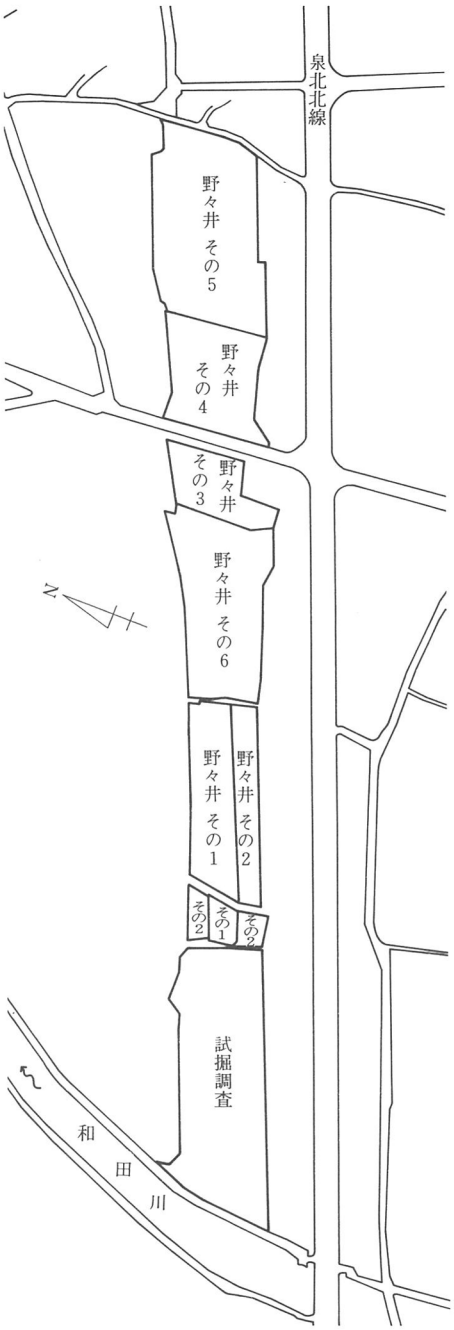
各調査区の調査面積は第３次調査が面積約2,000㎡、第４次調査は面積約3,000㎡、第５次調査は面積約5,590㎡である。

発掘調査は各調査区の担当者が道路公団と協議しながら行い、当協会が定める『発掘調査規程』に基づき実施した。

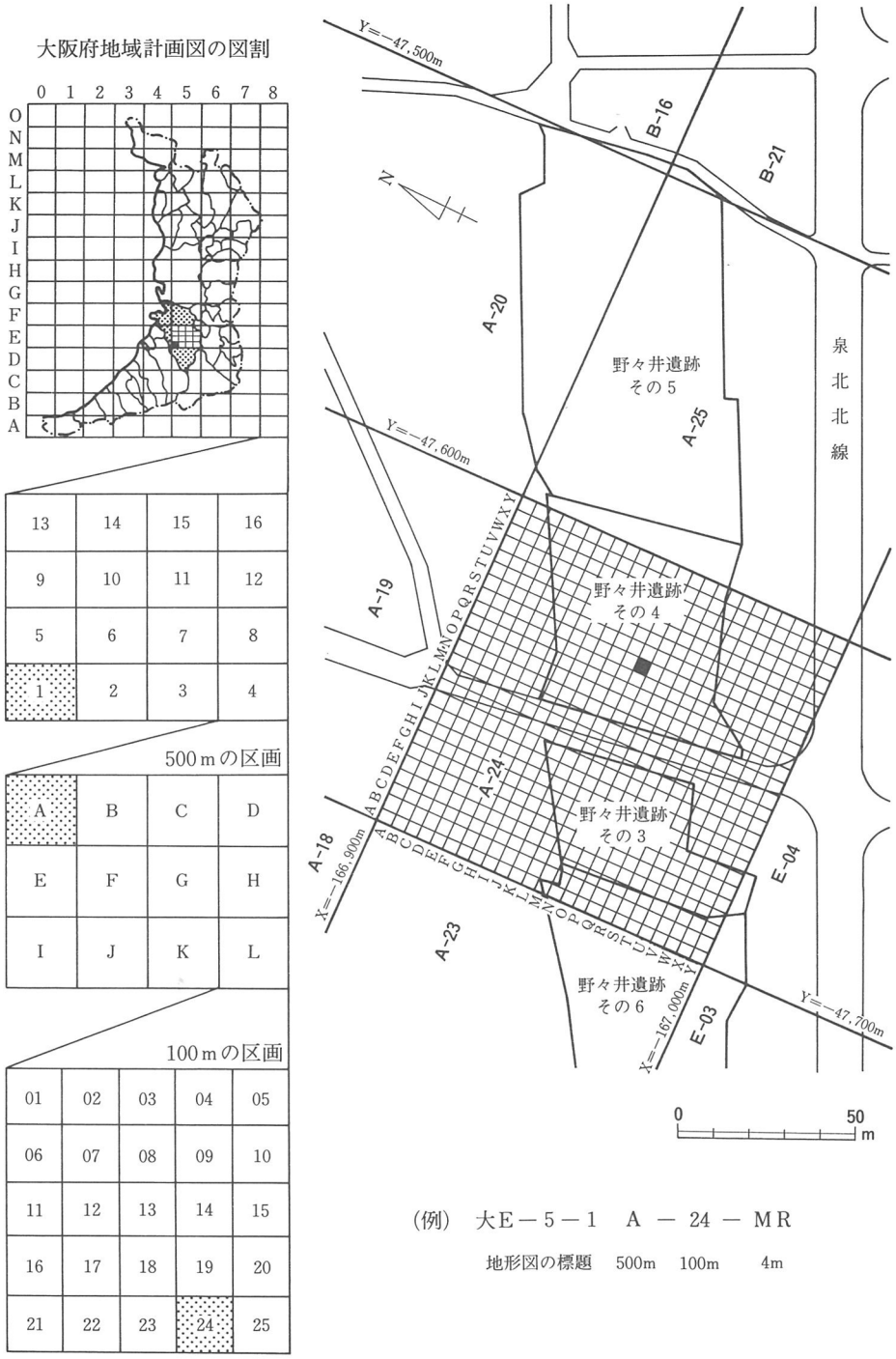
遺物の取り上げ及び遺構の実測に用いた地区名は、国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系を基に大阪府発行1/2,500の地形図に示された500ｍの区画を使用した。この区画にＡ～Ｌの記号を付け、さらに25等分し100ｍ区画を作り、区画には北西隅～東へ01～25の区画を作る。最後に100ｍ区画は625等分し４ｍ四方の区画を作る。以上の作業によって作られた縦方向25行、横方向25列の４ｍ区画は２文字の記号で表現され、区画の表示では縦方向を優先している。（第３図参照）

遺構の表記方法は、当協会が定めた略号を使用しており、本報告書に使用されている記号の意味は次の通りである。なお、番号は遺構名を示している。

| | |
|---|---|
| ＯＢ－建物 | ＯＦ－柵 |
| ＯＷ－井戸 | ＯＳ－溝 |
| ＯＯ－土坑 | ＯＺ－田畑 |
| ＯＰ－柱穴 | ＯＧ－古墳 |




第２図　調査区地区割略図




(例)　大E－5－1　A － 24 － MR

地形図の標題　500m　100m　4m

第3図　調査区地区割模式図

# 第II章　位置と環境　（第４・５図）

野々井遺跡は大阪府堺市野々井・赤坂台付近一帯に広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。堺市は弓長にのびる泉州地域の北部にあり、当遺跡の所在する堺市野々井は堺市の南部に位置している。

この地域は泉北丘陵と呼称される丘陵地帯で、和泉山脈から大阪湾に向かって派生する大小幾つかの丘陵や段丘で構成される。野々井遺跡はこれらの丘陵の中の栂丘陵に立地する。栂丘陵の規模は幅約１㎞、丘陵長は約７㎞で、他の丘陵に比べ比較的幅狭の低丘陵である。丘陵の東側には石津川、西側には石津川の支流である和田川が北流し、この河川に向かって丘陵縁辺部から大、小の支谷が形成される。また、石津川は泉北丘陵を流れる河川の中の中心的な河川で、幾度の合流を重ねながら、栂丘陵の先端部付近で和田川と合流し大阪湾へと注ぐ。

野々井遺跡はこの丘陵の西側縁辺部からその前面に広がる平地部に立地する。丘陵部は和田川に向かって延びる幾つもの開析谷によって形成され、地形分類では中位段丘である。

調査地付近の標高は約34m、丘陵先端部と平地部との標高差は約４ｍを測る。平地部には和田川が蛇行して流れ、遺跡周辺では河川右岸に沖積地を形成している。既往の調査ではこの丘陵部には弥生時代後期～古墳時代の集落や５～６世紀の古墳群が、平地部の微高地には弥生時代中期の集落などが展開することが明らかになってきている。また、平地部では弥生時代中～後期の旧河川や平安時代の建物なども確認され、広範囲に遺跡が広がることも明らかとなってきている。

次に周辺の歴史的な環境を野々井遺跡と直接的な関連のある縄文時代後期～古墳時代を中心に概観する。

泉北地域の縄文遺跡には、野々井遺跡の他、鈴の宮遺跡、小阪遺跡、大庭寺遺跡、西浦橋遺跡などがあり、遺構の検出例は少ないが遺物の出土例からは中期以降に遺跡数の増加する傾向が看取できる。晩期になると小阪遺跡や西浦橋遺跡などでは遺構が検出され、遺跡の立地など、集落の様相も明らかになりつつある。

弥生時代になると縄文晩期から継続して小阪遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡で集落が営まれる。しかし、石津川下流域に立地する四ツ池遺跡に遅れて泉北丘陵のほとんどが前期集落の弥生文化受容は前期後半に下る。この状況は平野部の四ツ池遺跡でいち早く受容さ

1．**野々井遺跡**　2．大庭寺遺跡　3．小阪遺跡
4．伏尾遺跡　5．深田橋遺跡　6．太平寺遺跡
7．万崎池遺跡　8．菱木下遺跡　9．菱木遺跡
10．西浦橋遺跡　11．鶴田池東遺跡　12．菱木上遺跡
13．山田北遺跡　14．山田古墳群　15．昭和池遺跡
16．山田遺跡　17．野々井西遺跡　18．野々井南遺跡

第４図　野々井遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）

れた弥生文化が、石津川を媒介として泉北丘陵の集落に受容されてゆく過程を示しているとともに、両地域集落との集団関係の在り方も示している。中期になると泉北丘陵では、前述の遺跡の他、野々井遺跡などでも集落の存在が明らかとなってきたが、その立地や遺構・遺物の状況からは、いずれも小規模な集落と考えられる。泉北丘陵では地形的な条件から生産基盤などを考えると、池上遺跡や四ッ池遺跡のような拠点的な大規模集落の成立は考えにくい。中期末～後期末にかけては新に丘陵上で集落の展開が見られる。高蔵丘陵の伏尾遺跡、栂丘陵の野々井遺跡、信太丘陵の昭和池遺跡などである。これらの遺跡はその立地からいわゆる高地性集落との関連が考慮されるが、石鏃などの出土量、集落の様相からは一般的な集落とするほうが妥当である。

古墳時代においては、先に上げた後期の集落のうち古墳時代前期まで存続する集落や、前期でも布留期に出現する集落などの様相が明らかとなってきた。また、古墳では割竹形木棺を内部主体に持つ二本木山古墳や埴輪列を巡らし直径約30mの円墳である小代古墳があり、この地の地域首長墓とされる。しかし、これらの開発規模は古墳時代中期に、この泉北丘陵で須恵器生産が開始された以後の開発とは比べものにならない。

この地で須恵器生産が開始された時期の窯跡はＴＫ73号窯、大庭寺遺跡ＴＧ231・232号窯、ＯＮ231号窯、濁り池窯など陶邑のなかに広く分布していることがわかってきた。

一方集落は最近の調査によって、陶邑の中でもいち早く生産を開始したことが明らかになった大庭寺遺跡や、小規模な工人集落とされる小阪遺跡などが発見されたが、その数は少ない。窯跡との関係からは集落も広く分布していると考えられる。須恵器生産が本格化した５世紀後半以後になると集落数は更に増加する。集落規模も大規模となり、伏尾遺跡、野々井遺跡、野々井南遺跡のように、古墳群を造営する集団も出現する。これらの古墳群は、10～20m前後の小方墳や小円墳で構成されているが、野々井南遺跡のように帆立貝型古墳や大型方墳など、古墳群の中で盟主的古墳が存在するものもある。

６世紀以後も泉北丘陵の開発は、一層活発に行なわれ次々と集落が成立する。これに伴ない造墓活動も活発化し、カマド塚と称される檜尾古墳群、陶器千塚などの特異な古墳も出現する。このような陶邑の中にあって、野々井遺跡は５世紀代だけでなく６世紀以後も集落・造墓活動を長期間継続していった数少ない遺跡であり、陶邑の成立と発展を考える上で重要な資料を与えてくれる。７世紀には野々井遺跡の周辺では集落は確認されていないが、奈良時代になると同じ栂丘陵の鶴田池東遺跡、大庭寺遺跡で集落活動が再び始まる。古代の陶邑の動向を考える上で重要な資料である。

第5図　野々井遺跡第3・4・5次（その3・4・5）調査地点（1/6,000）

# 第Ⅲ章　調査の成果

## 第１節　野々井遺跡その３の調査

### 第１項　調査概要　（第６図、図版１）

野々井遺跡その３調査区の周辺は、古くから宅地化が進み、さらには昭和40年代の泉北ニュータウンの開発に伴う道路が建設されたことにより、自然の地形は大きく改変されている。調査区内の現状もコンクリートブロックなどで盛土整地され、宅地化されていた。しかし、現在の残存する地形や宅地化以前の周辺地形図などを参考にすれば、当調査区は当遺跡の北西を北流する和田川に向かって延びる丘陵の先端部にあたることが読み取れる。地形図から読み取れる調査区周辺の丘陵幅は約15mで、平地部との比高差は3.5～4.0mを測る。

一方、周辺のこれまでの調査では、調査区西側の平地部で弥生時代中～後期の集落や旧河川、周辺丘陵部で弥生時代後期～古墳時代中期の集落や５～６世紀の古墳群が確認されている。当調査区もこのような考古学的環境や地理的環境から、当該時期の遺構の存在が予想された。

調査区内は、中央から西側が平地部と丘陵から平地部に向かって落ちる斜面地で、東側は丘陵地に地形分類される。

丘陵地は宅地化の影響のため大規模に攪乱されていた。攪乱を免れ残存した遺構には近世の埋甕遺構、不定形土坑がある。埋甕遺構は調査区の北東端に近接して３基、不定形土坑は南東端に集中して数基検出された。弥生時代や古墳時代の遺構は検出されなかった。

斜面部も攪乱を受けた部分があったが、弥生時代～中世の遺物の出土する自然堆積層や近世以後の耕作地に伴なう溝などが確認された。平地部は今回の調査では、調査面積が少なく弥生時代や古墳時代の状況は把握できず、中～近世の遺物を出土する堆積層が一部確認されたに留まった。おそらく当該時期の耕作地開発に伴なうものであろう。

また、斜面部の遺物包含層の状況や丘陵部における埋甕遺構の残存状況から、丘陵部の開発は中～近世の時期に行われたことは確実で、それ以前の遺構は当調査区では検出されていないが、この時期に削平された可能性もある。

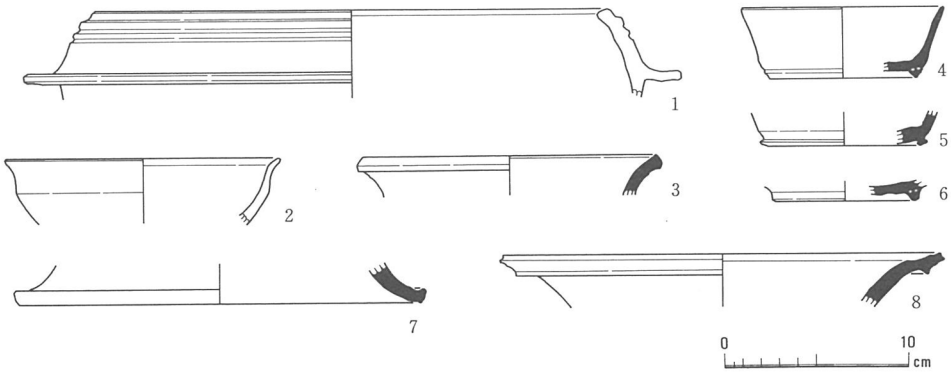
第６図　野々井遺跡その３遺構配置概略図（1/400）

### 第２項　基本層序と包含層の遺物　（第７・８図、図版１・26）

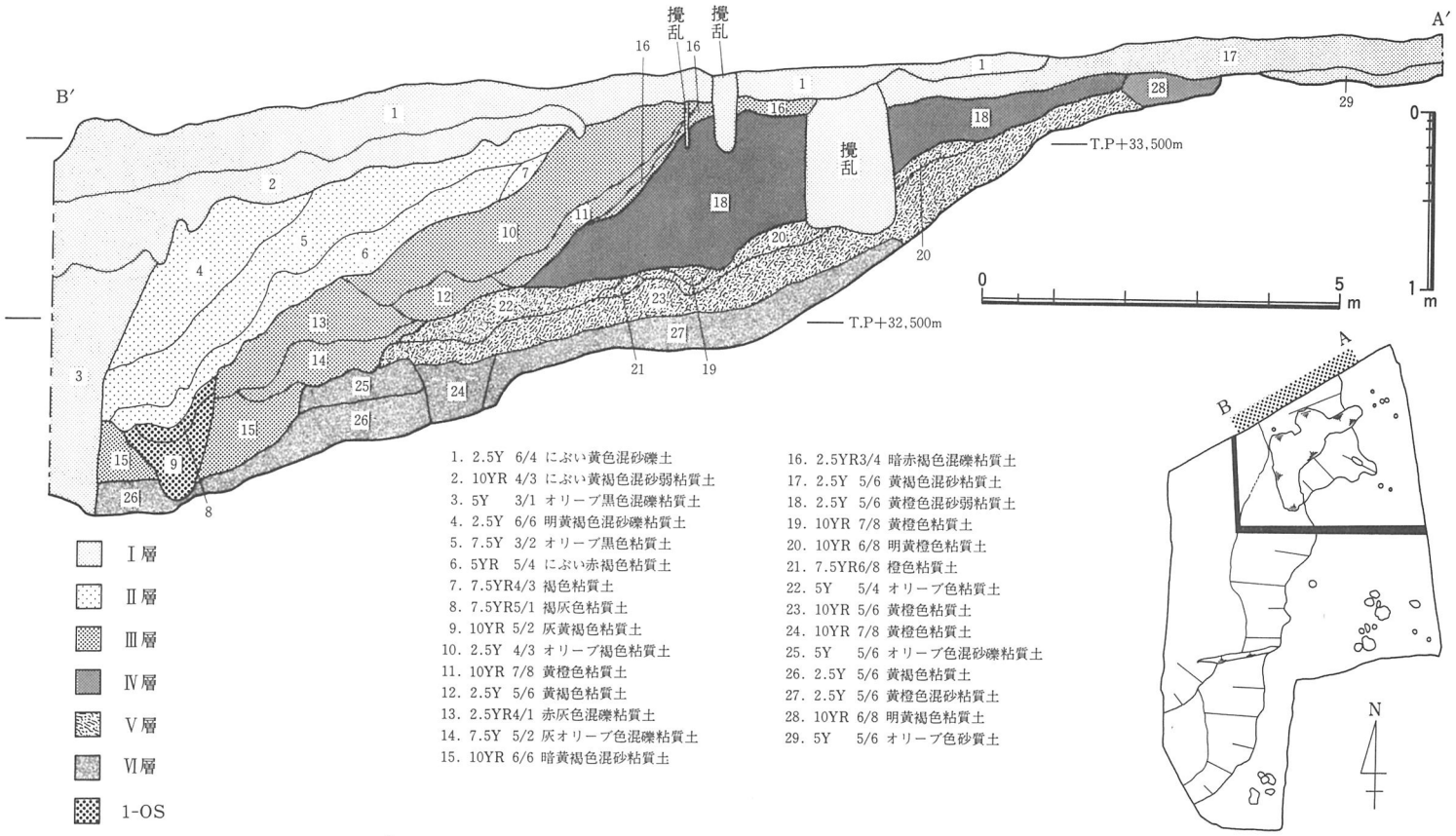
前項でも説明したが、当調査区は丘陵の先端部にあたり、丘陵部、平地部に向かって落ちる斜面部、平地部に地形分類される。丘陵部は、現代の整地土直下に段丘形成層が存在する。近世の遺構がこの面で検出され、当該期に大きく削平していることがうかがえる。

調査区内を南北方向に走る斜面部は、調査区南端では現代の攪乱のため詳細は把握できなかったが、北側では弥生時代～中世の遺物が出土する自然堆積層や近世の整地層が確認された。その状況を第８図に示した。Ⅰ・Ⅱ層は現代の宅地化に伴なう整地層である。Ⅲ・Ⅳ層は近世の耕作地開発に伴なう整地である。Ⅷ・Ⅸ層は斜面部と平地部の境界を南北に走る近世の溝（１－ＯＳ）の埋土である。Ⅴ・Ⅵ層は自然堆積層で、弥生時代～中世に至る土器が出土しているが、いずれも小破片である。図示できた遺物としては第７図（１～８）がある。（１）は15世紀代の瓦質羽釜、（２）は白磁碗、（４～６）は奈良時代の須恵器の杯、（３・７・８）は古墳時代の須恵器である。このうち（１～５）がⅤ層、（６～８）がⅥ層出土のものである。Ⅴ層中からは他にも弥生式土器や６世紀代の須恵器の細片が出土しているが、15世紀代以降の遺物の出土は見られず、Ⅵ層中からは奈良時代以降の遺物の出土は見られなかった。このように出土遺物からⅤ層は15世紀、Ⅵ層は奈良時代の堆積層と考えることができるが、特にⅥ層では遺物の出土量が僅少で堆積の時期は15世紀代まで下る可能性もある。Ⅵ層以下は段丘を形成する無遺物層である。

平地部は北側の一部で中～近世に至る耕作土層を確認している。中世の耕作土以下には自然堆積と考えられる黄褐色系の粘質土が確認されているが、検出範囲が部分的で出土遺物もないことから詳細は不明である。




第７図　斜面部第Ⅴ・Ⅵ層出土遺物（1/4）




1. 2.5Y 6/4 にぶい黄色混砂礫土
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐色混砂弱粘質土
3. 5Y 3/1 オリーブ黒色混礫粘質土
4. 2.5Y 6/6 明黄褐色混砂礫粘質土
5. 7.5Y 3/2 オリーブ黒色粘質土
6. 5YR 5/4 にぶい赤褐色粘質土
7. 7.5YR4/3 褐色粘質土
8. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
9. 10YR 5/2 灰黄褐色粘質土
10. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘質土
11. 10YR 7/8 黄橙色粘質土
12. 2.5Y 5/6 黄褐色粘質土
13. 2.5YR4/1 赤灰色混礫粘質土
14. 7.5Y 5/2 灰オリーブ色混礫粘質土
15. 10YR 6/6 暗黄褐色混砂粘質土
16. 2.5YR3/4 暗赤褐色混礫粘質土
17. 2.5Y 5/6 黄褐色混砂粘質土
18. 2.5Y 5/6 黄橙色混砂弱粘質土
19. 10YR 7/8 黄橙色粘質土
20. 10YR 6/8 明黄橙色粘質土
21. 7.5YR6/8 橙色粘質土
22. 5Y 5/4 オリーブ色粘質土
23. 10YR 5/6 黄橙色粘質土
24. 10YR 7/8 黄橙色粘質土
25. 5Y 5/6 オリーブ色混砂礫粘質土
26. 2.5Y 5/6 黄褐色粘質土
27. 2.5Y 5/6 黄橙色混砂粘質土
28. 10YR 6/8 明黄褐色粘質土
29. 5Y 5/6 オリーブ色砂質土

第８図　野々井遺跡その３北側断面図（縦1/20・横1/50）

## 第３項　遺構と遺物

１－ＯＳ　（第６・10図、図版26）

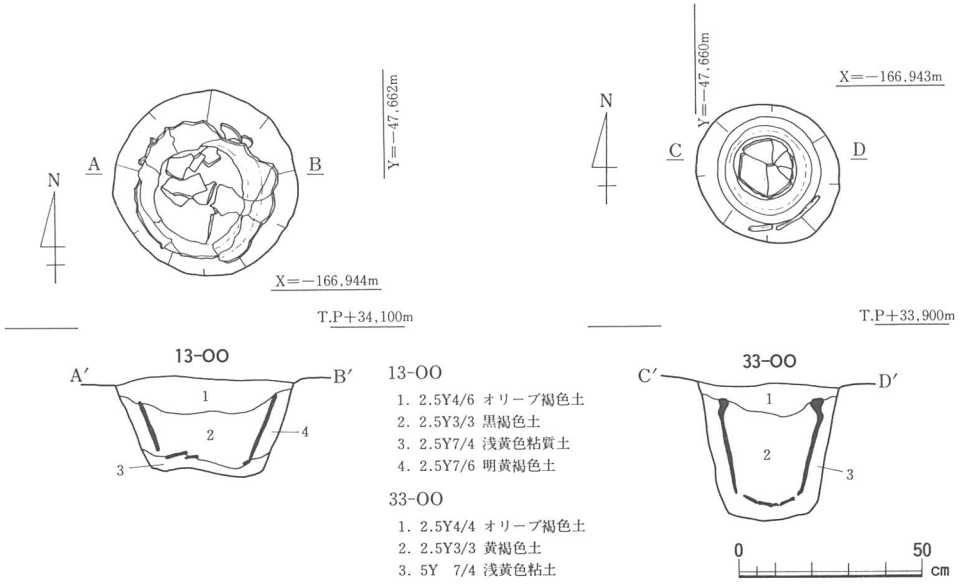
斜面部の下端部と平地部の境界を沿うように、南北方向に走る。斜面部を整地した後に掘削され、平地部の土層の関係などから耕作地に関連した水路と推定される。断面はＵ字状を呈し、幅0.75ｍ、深さ0.2～0.5ｍを測る。埋土は褐色系の粘質土である。遺物は第10図に示したが、染付碗（９・10）や瓶（11）、巴文軒瓦（12）など近世の遺物が出土した。

13－ＯＯ　（第６・９図、図版２）

調査区北東端の丘陵部に位置する近世の埋甕土坑である。土坑は円形を呈し、直径0.5ｍ、深さ0.26ｍを測る。土坑内に据えられた埋甕は、土師質甕を利用していた。甕は体部下半部のみの出土であったが、他の埋甕土坑の状況などより当初から体部の下半部を利用したものと推定された。甕の底径約25㎝で、同時期のものの中では小型のものである。

33－ＯＯ　（第６・９・10、図版２・26）

13－ＯＯの東側に近接して位置する埋甕土坑である。土坑は円形を呈し、直径0.37ｍ、深さ0.4ｍを測る。土坑内には第10図（13）の土師質鉢の完形品が据えられ、鉢の裏込めには部分的に平瓦の破片を補強材として用いている。また、体部下端には円孔が一箇所穿れるが、この円孔を土器片を用いてふさいだ様子は見られなかった。




第９図　13・33－ＯＯ平面・断面図（1/20）

11－ＯＯ　（第６図）

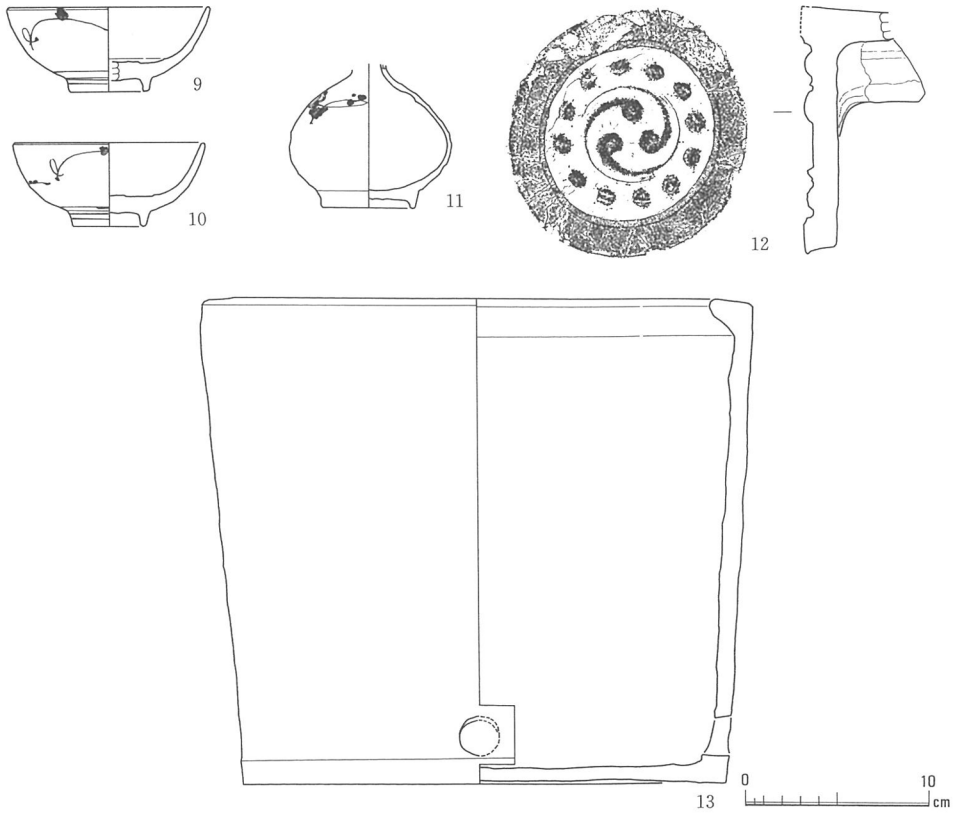
13・33－ＯＯに近接して位置する埋甕土坑である。土坑は円形を呈し、直径0.56m、深さ0.3mを測る。埋甕には13－ＯＯと同様に土師質甕の体部の下半部を利用していたが、底部を打ち欠き、体部のみを据えている。埋甕に用いられたこれらの土師質品はいずれのものも16世紀後半の所産と考えられる。

10－ＯＯ　（第６図）

前述の埋甕土坑群に近接して位置する直径0.53m、深さ0.4mの円形土坑である。遺物は出土していないが、埋甕土坑群との位置関係や土坑規模から、当土坑も埋甕土坑であった可能性もある。

９・12－ＯＯ　（第６図）

いずれも浅い土坑で、埋甕土坑群に近接して位置する。12－ＯＯからは土師質甕や瓦類の破片が出土している。




第10図　１－ＯＳ、33－ＯＯ出土遺物（1/4）

8－OO　（第6図）

調査区北東端、埋甕土坑群に近接して位置する。調査範囲の関係上全体は検出できなかった。検出最大長は1.3m、深さ0.14mを測る。埋土は褐色系の粘質土で16世紀後半の土師質土器や瓦類の破片が出土している。

6－OO　（第6図）

8－OOの南側に位置し、部分的な検出に留まった。深さは約0.6mを測り、他の土坑より深い。埋土は褐色系の砂混じりの粘質土で、自然の堆積ではなく意図的に埋め戻されている。遺物は土師質土器の破片が出土している。

2～4－OO　（第6図）

調査区東端の丘陵部で、三基の土坑が南北方向に並ぶように検出されている。いずれも調査範囲の関係上全体を把握できなかった。深さは2－OOが0.35m、3－OOが0.4m、4－OOが0.58mを測る。埋土は2－OOの様に粘土や砂礫土が大きなブロックとして混入するなど、いずれも自然の堆積ではなく意図的に埋め戻されていた。遺物は、それぞれの土坑から近世の瓦類が出土している。また、周辺には浅い小土坑が点在しているが、埋土や出土遺物などからこれらも同時期のものと考えられる。

20～28－OO　（第6図）

調査区南東端の丘陵部で検出された土坑群である。平面形はいずれも不整形で、規模は最大長1.7、1.2、0.5m前後などの3種類のものが混在する。しかし、深さはいずれも0.2m前後で浅い。埋土はいずれも単層で褐色系の粘質土である。

遺物は土坑群中で最大規模の28－OOから近世の染付碗や瓦類が出土しているが、他の土坑からの遺物の出土はなかった。

34～36－OO　（第6図）

調査区南端の丘陵上に位置する土坑群である。平面形はいずれも不整形で、規模は36－OOが最大で長さ1.5mを測る。深さはいずれも30㎝前後であるが、底部付近は凹凸である。埋土は褐色系の粘質土で、近世の土坑に比べ堅くしまっている。これらの状況から、風倒木痕跡など自然のものと推測された。遺物は出土していない。

17－OO　（第6図）

調査区北側の斜面部に位置する。小規模で非常に浅く自然の落ち込みの可能性がある。Ⅵ層の下層で検出され、遺物は出土しておらず明確な時期は不明だが、野々井遺跡その3調査区のなかで唯一中世以前にさかのぼるものである。

## 第２節　野々井遺跡その４の調査

### 第１項　調査概要　（第13図、図版３・７）

野々井遺跡その４の調査区周辺は、1990年７月から開始された第２次調査と平行して行った試掘調査で遺構が確認された地点である。当初、この地点は1987年に行った試掘調査時には未買収地点が多く、試掘調査はごく限られた部分で実施された地点であった。

試掘調査では古墳時代～中・近世にかけての遺構・遺物が検出されたが、周辺は住宅建設や耕地の造成時に削平されたためか遺構や包含層を確認できない地点もあった。

今回の調査地点は府道別所草部線の東側に位置し、東側は第５次（その５）調査が行われ、西側は道路を隔てて第３次（その３）調査が実施された中間地点にあたる。

調査地は泉北丘陵の一角をなす栂丘陵の段丘上に位置し、住宅や耕地として利用されていた。標高はT.P約35m前後の地点である。

調査地点では高速道路建設工事の進入路や取り壊し中の住宅等の障害があったため、２回に分けて調査を行った。１回目は調査地南側の約2/3を行い、２回目は進入路の切り替え後に残りの北側部分について実施した。

調査地は近～現代の攪乱及び削平を著しく受けていたが、調査区中央部で溝・ピット・土坑・井戸などが検出された。溝は古墳時代のものと、中世以降の耕作に伴うものと思われるものが検出された。ピットの検出は少なく、土坑は古墳時代の溝を切るような形状で検出された。

### 第２項　基本層序と包含層の遺物　（第11・12・14図、図版４・27）

今回の調査区は後世の攪乱及び削平を多く受けており、特に西側は府道別所草部線や住宅建設時の攪乱を受けている。

調査地の栂丘陵は西側を和田川の流れる谷に、東側を石津川の流れる谷に挟まれた高位段丘及び中位段丘であり、両方の川は丘陵北端部付近で合流し、堺市百舌鳥古墳群の南西部を流れ、大阪湾に流れる。調査地は栂丘陵の中位段丘西半分に位置し、和田川の氾濫原に向かって高度を下げる斜面の直上部分にあたる。調査地点から東側は階段状に造成され、野々井遺跡その５の調査地点との高低差は約1.5mで、西側は野々井遺跡その３の調査地

点で、和田川の氾濫原に下る斜面地である。調査区の西側は２－ＯＳの約１ｍ東まで盛土がなされ、耕作地として利用されていた。

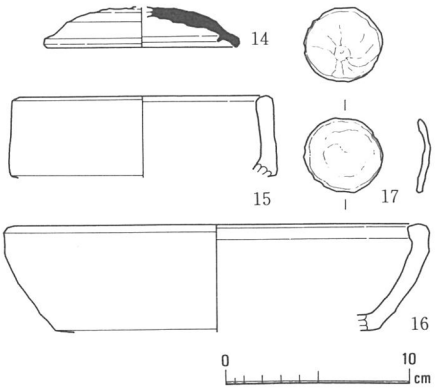
調査区全体で見ると包含層は薄く、堆積土層は大別して４層に分かれる。

第１層　現代耕作土（第14図土色番号１）である。灰色土層で砂を多く含む。調査区北西側では住宅建設によって削平されていたため確認されなかった。

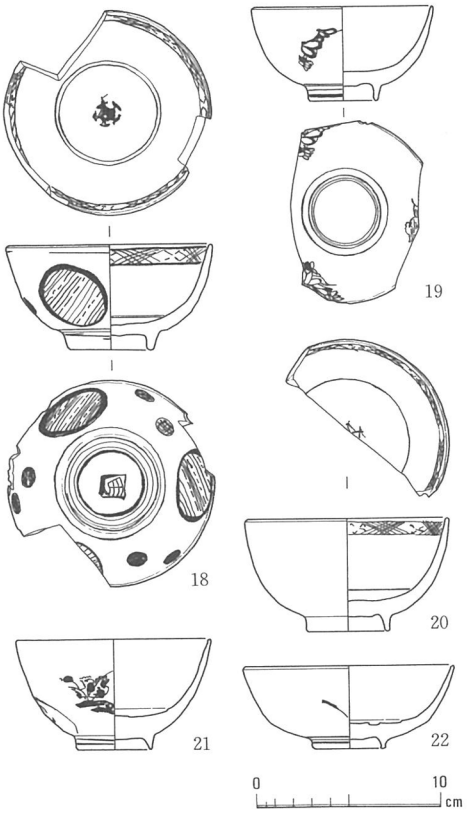
第２層　近～現代の盛土層で床土として利用されている部分もある。調査区南側では灰黄褐色土（第14図土色番号７）と黄褐色土（第14図土色番号10）がある。前者は少量だが須恵器、土師器、瓦器片を含むが、後者は遺物を含まない。西側では灰色土（第14図土色番号13）で遺物が含まれるが旧耕作土の可能性もあり、北方向に向かうと黄褐色土の遺物を含まない層が見られる。

第３層　調査地の北側と南側で部分的に見られる層で、中世の整地土もしくは耕作土ではないかと思われる。北側では灰色土（第14図土色番号25）及び黄褐色土（第14図土色番号26）で、南側は灰オリーブ色土（第14図土色番号８）と灰色土（第14図土色番号13）である。いずれの層も残りが悪く遺物の出土も少ないため断定はできない。

第４層　地山層である。地山相当層の上部は粘土と砂礫層が互層になり、粘土層には上端面からの乾痕が認め

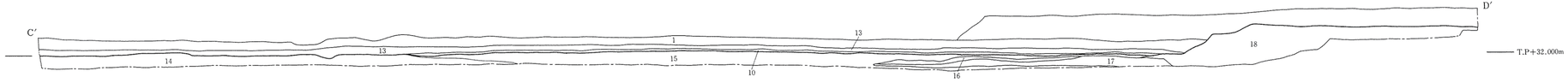


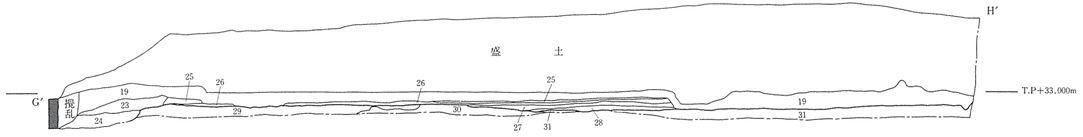

第11図　包含層出土遺物１（1/4）



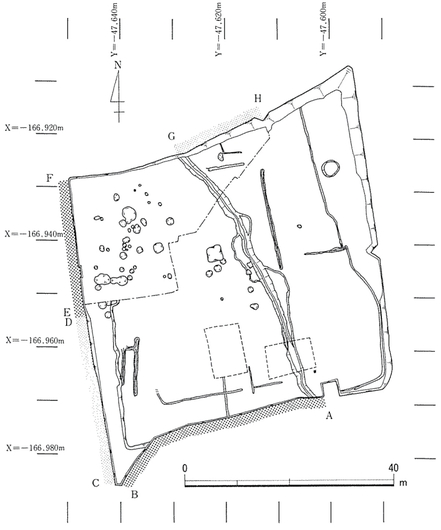

第12図　包含層出土遺物２（1/4）

第13図　野々井遺跡その４遺構配置概略図（1/400）






1. 7.5Y　4/1 灰色土（耕作土）
2. 10YR　6/3 にぶい黄橙色土（中砂を多く含む）
3. 10YR　5/2 灰黄褐色土（小石を多く含む）
4. 7.5YR6/1 褐灰色粘土（小石を多く含む）
5. 2.5Y　7/1 灰白色粘土（小石を多く含む）
6. 2.5Y　5/4 黄褐色土（小石・中砂を多く含む）
7. 10YR　6/2 灰黄褐色土（小石・中砂を多く含む）
8. 5Y　5/3 灰オリーブ色土（小石・中砂を多く含む）
9. 10Y　6/1 灰色土
10. 10YR　5/6 黄褐色土
11. 2.5Y　5/2 暗灰黄色砂礫層（中砂を多く含む）
12. 5Y　6/2 灰オリーブ色土（小石を多く含む）
13. 5Y　6/1 灰色土
14. 5Y　4/4 暗オリーブ色砂礫層（小石・中砂を多く含む）
15. 5Y　6/1 灰色粘土
16. 2.5Y　6/1 黄灰色砂礫層（小石・中砂を多く含む）
17. 2.5Y　5/6 黄褐色中砂層
18. 2.5Y　6/4 にぶい黄色砂礫層（小石・中砂を多く含む）
19. 10YR　3/1 黒褐色土（耕作土）
20. 2.5Y　6/3 にぶい黄色砂礫層（小石・中砂を多く含む）
21. 10YR　5/1 褐灰色土（現代溝路）
22. 10YR　6/4 にぶい黄橙色砂礫層（小石・中砂を多く含む）
23. 2.5Y　6/4 にぶい黄色土（小石・中砂を多く含む）
24. 10Y R 5/1 褐灰色土（小石・中砂を多く含む）
25. 10Y　6/1 灰色土
26. 10Y R 5/8 黄褐色土
27. 10Y R 6/1 褐灰色土（小石・中砂を多く含む）
28. 2.5Y　6/2 灰黄色土（中砂を多く含み、マンガンも含む）
29. 10YR　6/2 灰黄褐色土（中砂を多く含み、マンガンも含む）
30. 7.5GY6/1 オリーブ灰色砂礫層（中砂を多く含む）
31. 5GY　6/1 オリーブ灰色粘土（中砂ブロック含む）




第14図　野々井遺跡その４断面図（1/80）

られる。調査区の中央部には南北方向の砂礫層が見られる。

包含層出土の遺物としては第11・12図の（14～22）がある。第11図は調査区南側で確認された８層（第８図）よりの出土で、第12図は調査区北側の19層からの出土である。

（14）は須恵器の杯蓋で復元口径10.4㎝、復元器高2.2㎝を測る。口縁端部は丸く、内傾するかえりを有し、天井部は平に近い。擬宝珠様のつまみを持つものかもしれない。

（15）は土師質の鉢で復元口径13.4㎝、残存器高4.3㎝を測る。口縁端部は丸く、やや内傾する。内・外面とも摩滅のために調整は不明である。（16）も土師質の鉢で復元口径22㎝、残存器高5.8㎝を測る。口縁端部は丸く内面にはヨコナデがみられる。外面は摩滅のために調整は不明である。（17）は土師質で円盤状の土製品である。直径4.2㎝、厚さ0.4㎝で、レンズ状に中央部がへこんでいる。（18）は染付碗で口径11㎝、器高5.8㎝を測る。外面には丸窓文が見られ、内面の口縁端部には四方襷文と、見込みにコンニャク印判による五弁花文が見られる。（19）は染付碗で口径9.8㎝、器高5.1㎝を測る。外面には菊花文が見られる。（20）は染付碗で復元口径11㎝、器高6.1㎝を測る。外面には緑釉を全面に施し、内面の口縁端部には四方襷文が見られる。（21）は染付碗で口径10.5㎝、器高６㎝を測る。外面には花草文が見られ、内面見込み部分の釉を輪状に削りとっている。（22）は染付碗で口径11.4㎝、器高4.5㎝を測る。内面見込み部分の釉を輪状に削りとっている。

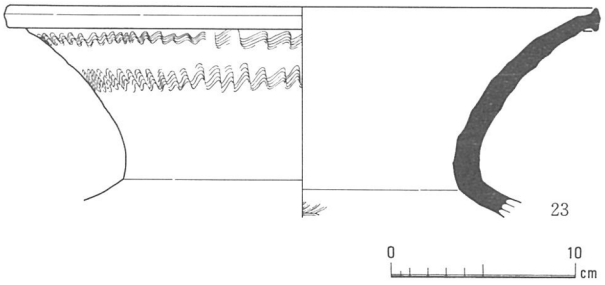
## 第３項　遺構と遺物

### Ⅰ．古墳時代

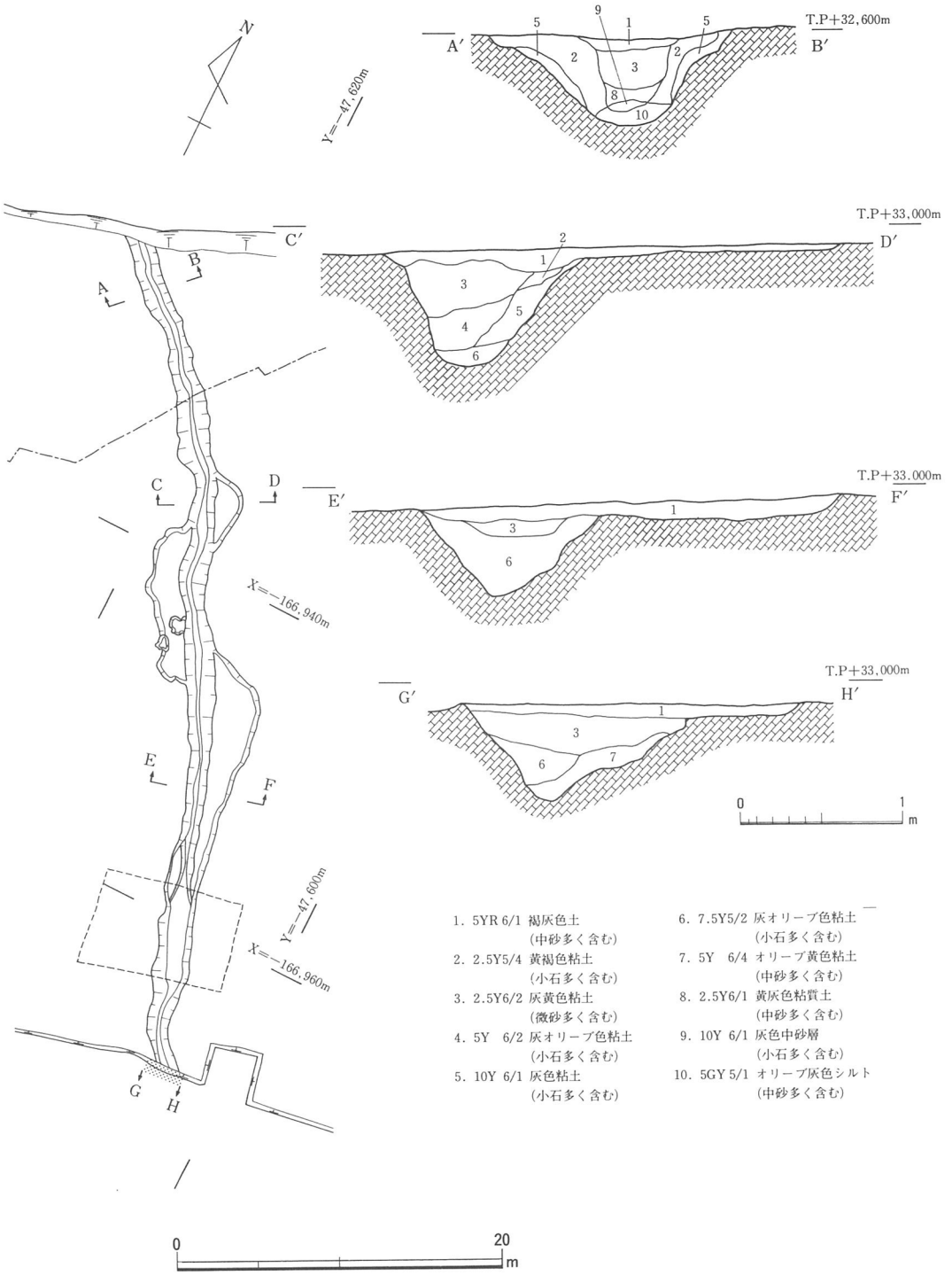
#### ４－ＯＳ　（第13・15・16図、図版５・８・９・27）

調査区中央を南～北西方向に走り、両端を調査区外に延ばす。後世の削平によって本来の形状及び規模は不明であるが、検出最大幅1.5m、深さ約0.6mを測る。

断面形状はＵ字状を呈する部分も見られるが、基本的にはＶ字状を呈すると思われる。埋土は緩やかな流れの際に堆積したと思われる粘土（シルト）層と、水量の比較的多い時期に堆積したと思われる砂




第15図　４－ＯＳ出土遺物（1/4）




第16図　4－ＯＳ平面・断面図（1/400・1/40）

と礫を多く含む粘土質とに分層される。現状の断面から考えると大きく３つに分層することができると思われる。

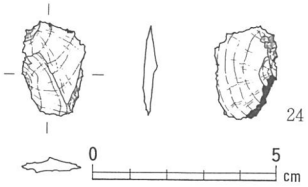
遺物としては弥生式土器と思われるものや須恵器壺、甕、器台、長頸壺、土師器、瓦器碗などが出土した。弥生式土器と思われるものは、試掘の際にも出土しているが、いずれも細片で摩滅しているため混入品と考えられる。土師器、瓦器碗は溝の上部にて検出された。いずれの遺物も出土量が少なかった。

図示できた出土遺物としては第15図（23）がある。（23）は須恵器の甕で復元口径32㎝、残存器高11㎝を測る。外面の口頸部には２条の波状文（５～６本）が見られ、内面には当て具痕が微かに残る。

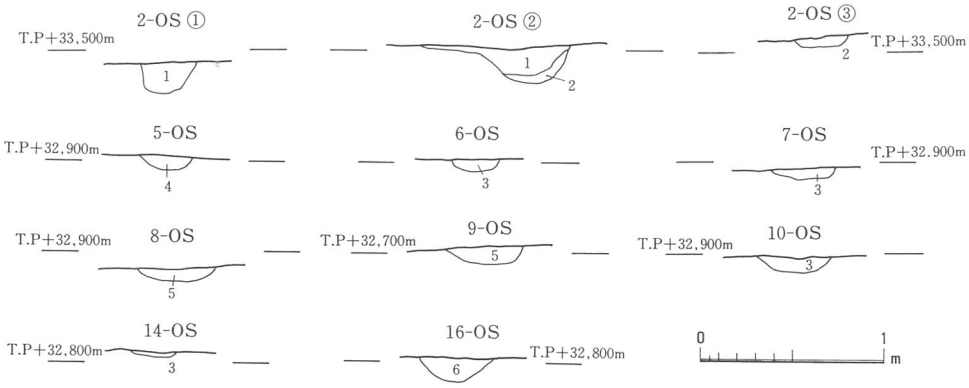
## Ⅱ．中世以降

### １－ＯＷ　（第13・17図、図版６・27）

調査区北東側のＡ24－ＧＹ、Ａ25－ＧＡ地区にて検出された井戸である。井戸は円形を呈し、直径約3.2m、深さは約1.5mまで掘削した。埋土は上部より2.5Y6/6明黄褐色砂礫層、7.5GY7/1明緑灰色粘土、10YR5/8黄褐色砂礫層で、上部はやや攪乱を受けていた。出土遺物としては、摩滅した土師器の細片のほか石器がある。図示できた遺物は第17図（24）である。（24）はサヌカイト製の縦長剥片である。原礫面を




第17図　１－ＯＷ出土遺物（1/2）



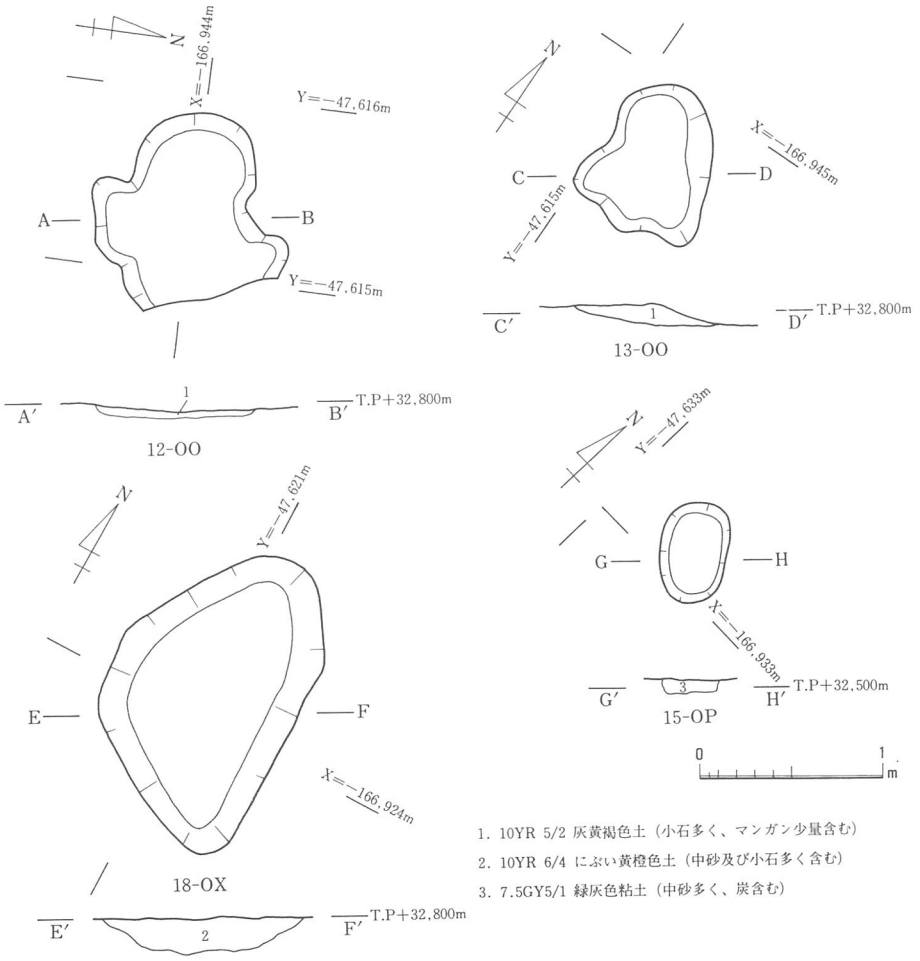

1. 10YR 5/3 にぶい黄褐色土（小石多く含む）　2. 7.5Y 4/1 灰色土（小石多く含む）　3. 7.5YR6/1 褐灰色土（小石多く含む）
4. 7.5YR5/1 褐灰色土（中砂多く含む）　5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土（小石及び中砂多く含む）　6. 10YR 5/6 黄褐色土（中砂多く含む）

第18図　２・５～10・14・16－ＯＳ断面図（1/40）

残す面と、２次調整が施される面とが見られる。長さ2.5㎝、幅1.7㎝を測る。この井戸は近世以降のものと考えられ、出土した石器は埋没の際に混入したものと思われる。

２－ＯＳ　（第13・18図、図版６）

調査区東側を南北方向に走り、南側を調査区内でＬ字状に曲げ西方向に延びる。また、調査区のほぼ中央部で水口状の西方向に走るものも併せて検出された。この溝の周辺は東側（野々井遺跡その５）が約1.5mほど高く、丘陵より一段低くなる地点である。溝は段下部を走り、耕作地に関連したと思われ、中世以降の開発（耕作地の造成）によって埋没したものと思われる。断面形状はＵ字状を呈し、幅0.3m、深さ10㎝前後を測る。




第19図　12・13－ＯＯ、15－ＯＰ、18－ＯＸ平面・断面図（1/40）

遺物は土師器、瓦器の摩滅した細片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

3－ＯＰ　（第13図）

Ａ24－ＪＸ地点で検出されたピットである。直径約0.6mのやや楕円形を呈し、深さ５㎝前後と浅い。遺物はなく時期は不明である。

5－ＯＳ　（第13・18図）

調査区の南側を東西方向に走り、西側をＬ字状に曲げ北西方向に延びる。断面形状はＵ字状を呈し、幅0.3m、深さ８㎝前後を測る。埋土は7.5ＹＲ5/1褐灰色土である。

遺物は少ないが13世紀後半頃と思われる瓦器碗の小片が出土している。

6－ＯＳ　（第13・18図）

調査区の南側を南北方向に走り、５－ＯＳを切っている。断面形状はＵ字状を呈し、検出全長5.3m、幅0.2m、深さ５㎝前後である。埋土は7.5ＹＲ6/1褐灰色土である。

7－ＯＳ　（第13・18図、図版６）

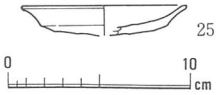
６－ＯＳの約5.3m西側に位置し、南側を調査区外に延ばす。北側は試掘調査のトレンチによって切られている。検出全長約７m、幅0.4m前後、深さ５㎝前後である。

埋土は7.5ＹＲ6/1褐灰色土である。遺物は土師器の小片が数点出土した。

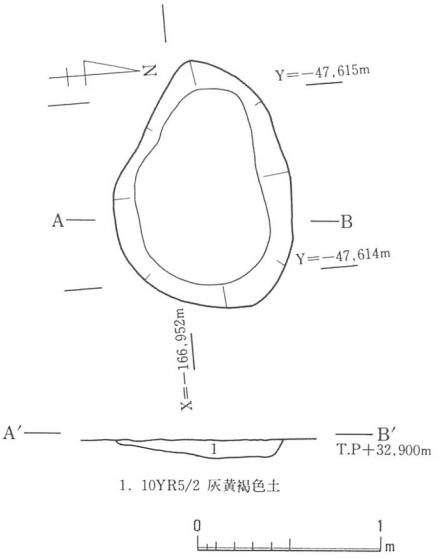
8・9－ＯＳ　（第13・18図）

調査区の南西側で検出され、南北方向に平行して走る。幅は両方とも0.5m前後で、深さ10㎝前後を測る。

埋土は10ＹＲ4/3にぶい黄褐色土である。遺物は出土しなかった。




第21図　11－OO出土遺物(1/4)




第20図　11－ＯＯ平面・断面図（1/40）

10－ＯＳ　（第13・18図、図版６）

調査区の中央部を南北方向に走る。検出全長11.2m、幅0.4m、深さ10㎝前後を測る。埋土は7.5ＹＲ6/1褐灰色土である。遺物は土師器の小片が数点出土した。

11－ＯＯ　（第13・20・21図、図版27）

調査区の中央部Ａ24－ＭＶ・ＮＶ地区に位置する。不整形な楕円形で長径1.5m、短径１m、深さ10㎝前後を測る。埋土は10ＹＲ5/2灰黄褐色土である。遺物は瓦器碗、瓦器小皿、などが出土した。図示できた遺物としては第21図（25）がある。（25）は瓦器小皿で復元口径９㎝、器高1.6㎝を測る。内・外面の調整は摩滅しているため不明である。

12－ＯＯ　（第13・19図、図版６）

調査区の中央部Ａ24－ＫＶ・ＬＶ地区に位置し、４－ＯＳに切られるような形で検出された。不整形な土坑で長辺1.2m、短辺0.9m、深さ５㎝前後を測る。埋土は10ＹＲ5/2灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

13－ＯＯ　（第13・19図、図版６）

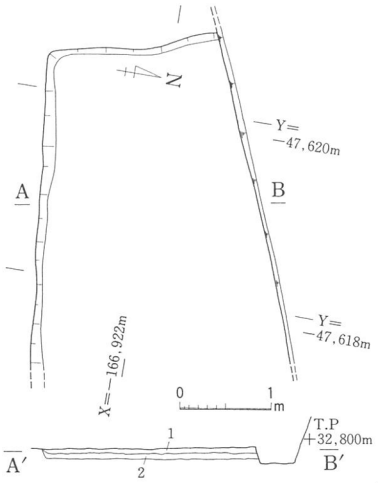
12－ＯＯの南西側でＡ24－ＬＶ地区に位置し、４－ＯＳの肩部を切るようにして検出された。不整形な土坑で長辺0.9m、短辺0.7m、深さ３㎝前後である。埋土は10ＹＲ5/2灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

14－ＯＳ　（第13・18図）

調査区北側のＡ24－ＧＵ・ＧＶ地区に位置し、東西方向に走る。西端は調査区切り替え時のトレンチで切ってしまった。検出全長2.5m、幅0.2m、深さ２㎝前後を測る。埋土は7.5ＹＲ6/1褐灰色土である。遺物は出土しなかった。

15－ＯＰ　（第13・19図）

調査区北西側のＡ24－ＩＱ地区に位置し、住宅跡付




1. 10YR6/1 褐灰色土（小石及び中砂多く含む）
2. 2.5Y 6/2 灰黄色土(マンガン多く含む)

第22図　17－ＯＸ平面・断面図(1/80)

近で検出された。長楕円形に近い不整形なもので長径0.55m、短径0.4m、深さ10㎝を測る。埋土は7.5ＧＹ5/1緑灰色粘土で、少量の炭を含む。遺物は出土しなかった。

16－ＯＳ　（第13・18図、図版９）

調査区の北側Ａ24－ＧＴ・ＧＵ地区に位置し、東西方向に走る。西側は近世に削平されたと思われる段があり、この段によって西側は切られている。断面形状はＵ字状を呈し、検出全長約７ｍ、幅0.35m、深さ10㎝前後を測る。埋土は10ＹＲ5/6黄褐色土である。遺物は少量の土師器片が出土した。

17－ＯＸ　（第13・22図、図版９）

調査区北端のＡ24－ＦＴ・ＦＵ地区で検出された。北側を調査区外に延ばすため本来の形状は不明であるが、旧耕作土の残りかもしれない。長辺3.5m、短辺1.8m、深さ10㎝前後を測る。埋土は上層が10ＹＲ6/1褐灰色土、下層が2.5Ｙ6/2灰黄色土である。遺物は出土しなかった。

18－ＯＸ　（第13・19図、図版９）

Ａ24－ＦＴ・ＧＴ地区に位置し、17－ＯＸの西側で検出された。不整形な楕円形を呈する。埋土は10ＹＲ6/4にぶい黄橙色土である。遺物は出土しなかった。

## 第３節　野々井遺跡その５の調査

### 第１項　調査概要　（第23図、図版10）

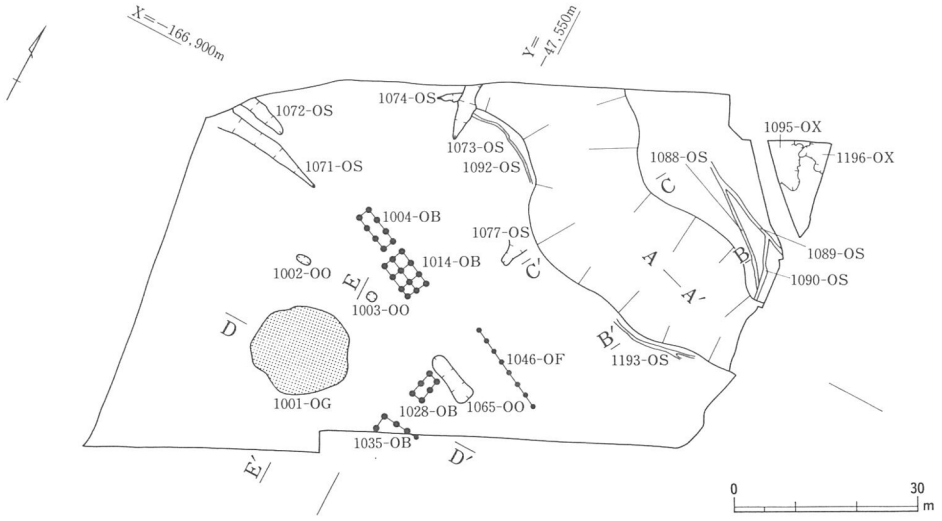
調査区は泉北地域に伸びる栂丘陵の一支脈の先端部に位置する。北側は、ため池に利用されていたが、開析谷の自然流路をせきとめてため池としていたことが判明した。

丘陵部の調査では古墳～室町時代の遺構を検出することが出来た。

古墳時代の遺構は、６世紀後半の円墳１基、土坑２基を検出した。調査区全域から５世紀後半～６世紀末の須恵器が出土しており、６世紀後半の遺物出土量から考えて上記の遺構以外の当該期の集落及び墓地の存在が推測される。窯跡の存在の可能性については、溶着した土器片も少数しか出土しなかったために、この地域での窯跡は否定できると思われる。

次に遺構が存在するのは鎌倉時代（13世紀）で掘立柱建物跡４棟、土坑６基、溝５条が検出された。谷部の調査で、完形の瓦器碗が南北両丘陵の谷の肩部で出土していることより北側丘陵にも鎌倉時代の遺構群が存在したと思われる。

室町時代（15世紀）では土坑３基、水利に伴う溝１条のほか耕作に伴うと思われる溝が多数検出された。今回の調査区周辺の地形改変は、大溝の存在により、鎌倉時代以降と推定されるが、その大溝も東側がかなり削平された状態で検出されており、本格的な周辺の地形改変（平坦化）は、耕作された15世紀段階であることが判明した。




第23図　野々井遺跡その５主要遺構配置図（1/1,200）

谷部から斜面にかけては、近世～現代までの耕作により地形の改変を多く受けているが、近世については水利に伴う溝５条と井戸１基を検出できた。近世段階では谷部がかなり埋没し、一部にしがらみを作って水流を調整していたと思われる。

### 第２項　基本層序と包含層の遺物

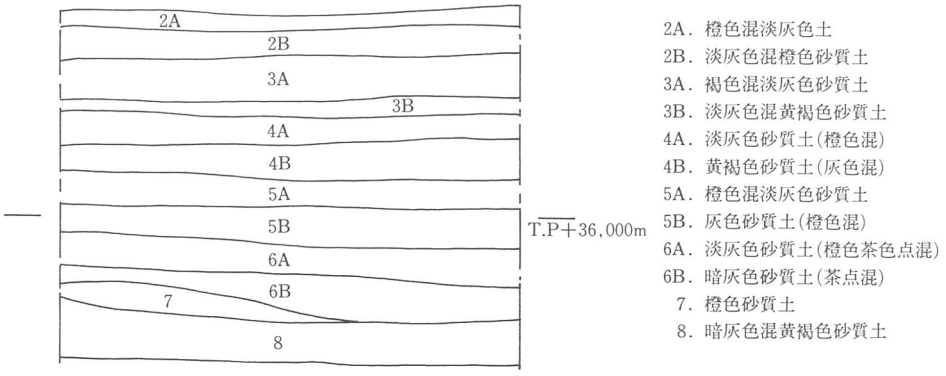
丘陵部から斜面、谷部にかけて一連の層序であるが、相互の堆積状況を十分つかめなかったため、丘陵部（整地土）、斜面、自然流路内と別々に概説する。

#### Ⅰ．丘陵部　（第24図）

丘陵部は現代耕作土、床土（第１層）を除くと、南側の古墳を築造されたと考えられる堀り割り部分に２～７層が堆積する。２～６層は、それぞれ２層に細分することができ、Ａ層は淡灰色砂質土、Ｂ層は黄褐色砂質土で、それぞれ耕作土、床土を相互に形成していたと思われる。丘陵を開発する際には低い部分をかさ上げし耕地化したものと思われる。かさ上げされた部分の整地土内に古墳～室町時代までの遺物を含む。

#### 第２層　（第24・25図、図版28）

古墳時代～中世後期の遺物を含む層である。出土遺物は瓦質の土釜３点、炮烙２点、15世紀代の甕１点、常滑焼甕、土師質土釜15点、土師器皿４点、13世紀の瓦器底部小片121点、瓦21点である。須恵器については５世紀後半～飛鳥・奈良時代に下るものも存在し、




第24図　丘陵部（整地土）断面模式図

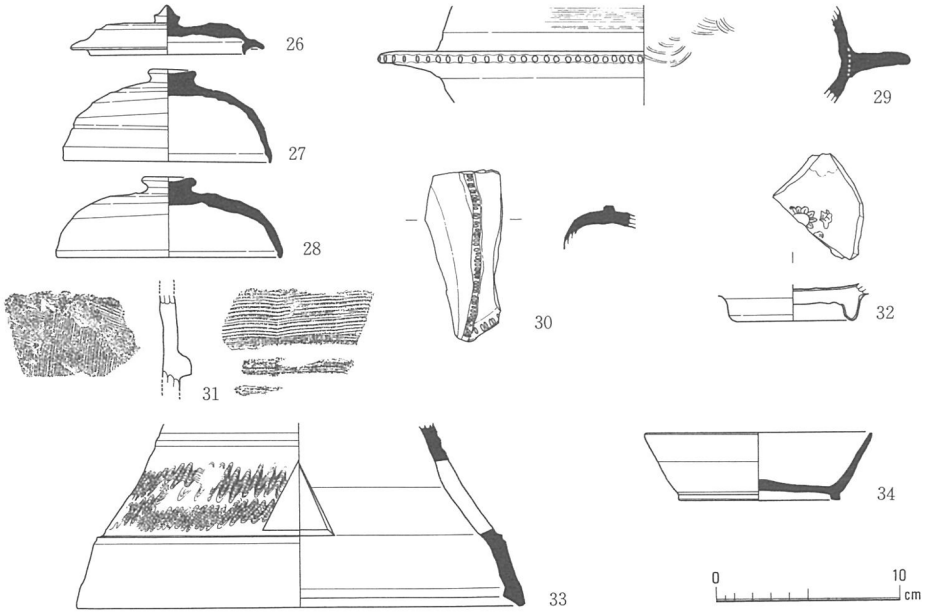
器種は杯54点、甕26点、器台11点、高杯９点である。

図示できた主な出土遺物としては第25図（26～32）がある。（26～28）は須恵器杯蓋である。（26）は口径8.4㎝で口縁部は短く垂直気味に下がり、端部は丸く、中央部に宝珠状のつまみを持つ。（27･28）は口縁部をやや外側に開き、中央に上面のやや凹んだつまみを持つ。（29）の器種は不明であるが、釜状（羽釜）のものではなかろうか。鍔状に張り付けられたものの外側には刻み目が施されている。（30）は皮袋形瓶と思われる。（31）は円筒埴輪で外面はヨコハケ調整、内面はヨコハケ後タテハケ調整を行っている。（32）は青磁碗の底部で復元底径6.2㎝を測る。内面見込みに印花文をもち、中国製と思われる。

第３層　（第24・25図、図版28）

古墳時代～中世後期の遺物を含む。出土遺物は瓦質の土釜３点、常滑焼甕３点、土師質の土釜４点、13世紀の瓦器底部小片26点、東播系須恵器こね鉢３点、瓦８点である。須恵器については５世紀後半～飛鳥、一部奈良時代に下るものがある。出土した遺物の器種としては杯54点、甕９点、器台11点、高杯12点などがある。

図示できた主な出土遺物としては第25図（33･34）がある。（33）は器台の脚部である。復元底径15.8㎝で三角形のスカシを４方向に付け、波状文を２条（10本前後）めぐらす。




第25図　第２・３層出土遺物（1/4）

(34) は杯身で口径12㎝、器高3.6㎝、底径8.8㎝を測り、短い高台を持つ。

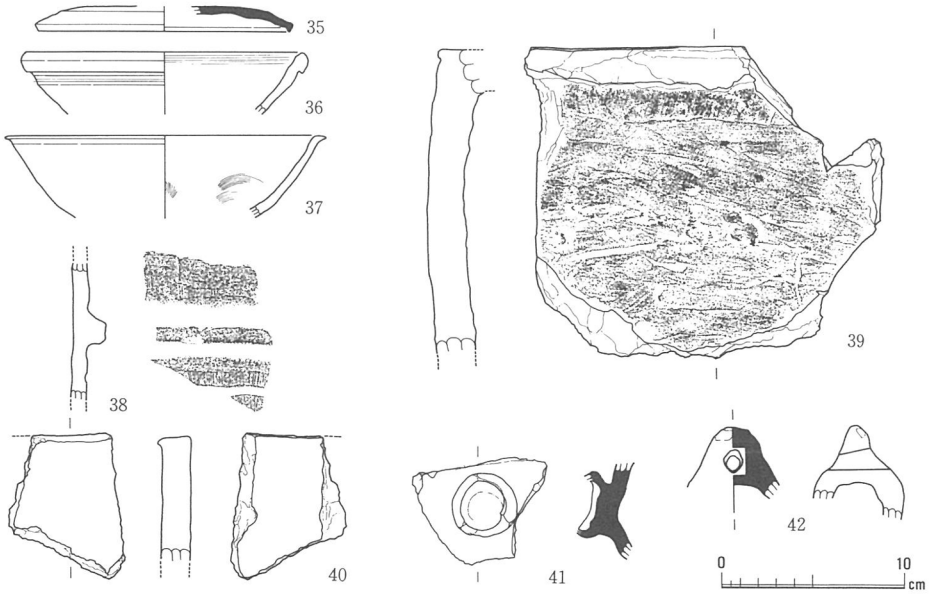
**第４層**　(第24・26図、図版29)

古墳時代～中世後期の遺物を含む。出土遺物は15世紀の瓦質の土釜５点、常滑焼甕７点、土師質の土釜４点、13世紀の瓦器底部小片58点、白磁２点、青磁３点、東播系須恵質鉢１点、瓦３点である。須恵器については５世紀後半～飛鳥、一部奈良時代に下るものも存在する。出土した遺物の器種としては杯17点、甕８点、壺15点、長頸壺１点、瓶６点、器台12点、高杯２点がある。

図示できた主な出土遺物としては第26図（35～39）がある。(35) は須恵器の杯蓋で口径13.8㎝を測る。(36・37) は青磁碗で、口径はそれぞれ15.2、16.4㎝を測る。(38) は円筒埴輪で、外面にはタテハケ後にヨコハケ調整を施しているが、内面調整は剝離が著しいため不明である。(39) は陶棺の破片である。色調は灰白色で、粗い削り痕が見られる。

**第５層**　(第24・26図、図版29)

古墳時代～中世後期の遺物を含む。出土遺物は15世紀の瓦質土釜１点、常滑焼甕５点、土師質の土釜７点、13世紀の瓦器底部小片48点、陶磁器（白磁、青磁）、東播系須恵質鉢、瓦などがある。須恵器については６世紀後半～飛鳥、一部奈良時代に下るものも出土する。




第26図　第４・５・６層出土遺物（1/4）

器種は6世紀代の杯が13点、7～8世紀代の杯が4点、甕9点、長頸壺2点、瓶3点、瑯1点、器台14点、高杯などがある。また、埴輪も1点出土している。

図示できた主な出土遺物としては第26図（40・41）がある。（40）は須恵質の瓦である。（41）は装飾付器台の破片であると思われる。

第6層　（第24・26図、図版29）

古墳時代～中世後期の遺物を含む。出土遺物は15世紀の瓦質土釜、常滑焼甕6点、土師質の土釜5種41点、13世紀の瓦器底部小片70点、陶磁器（白磁、青磁）、東播系須恵器鉢、瓦5点などである。須恵器については6世紀前半～飛鳥、一部奈良時代に下るものも存在する。器種は6世紀代の杯が11点、7～8世紀代の杯が6点、甕8点、器台6点、高杯4点などがある。

図示できた主な出土遺物としては第26図（42）がある。（42）は須恵器のたこ壺で残存器高5.2㎝を測る。

第7層　（第24図）

橙色砂質土で遺物の出土は少ないが須恵器短頸壺2点のほか土師器3点、須恵器甕2点が出土した。

II．斜面

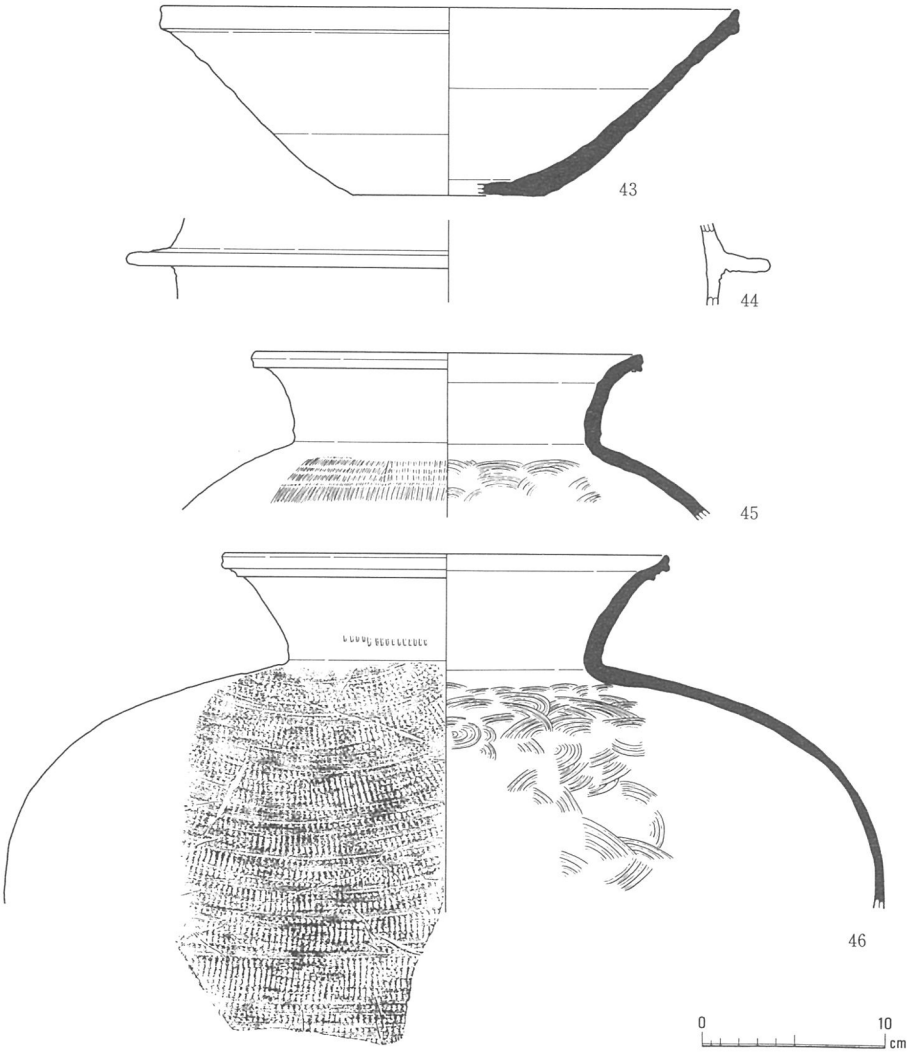
斜面地形の部分は丘陵部よりため池に向かって堆積している地点である。この地点は調査区の北側に位置するが、近～現代の地形改変が著しく行われているため、旧地形の復元は困難である。盛土以下は大きく4層に分類することができた。

斜面第1層　（第27・29図、図版29）

明黄褐色礫混土（第29図B－B′・C－C′土色番号4）で近代以降の耕作に伴う整地層と考えられる。陶磁器4点のほか土師器土釜5点、常滑焼甕4点、瓦（中世～近代を含む）、瓦器3点、須恵器杯5点（5世紀末～飛鳥時代）、須恵器甕、東播系須恵器などが出土した。図示できた主な出土遺物としては第27図（43・44）がある。（43）は東播系須恵器のこね鉢で、口径31㎝、器高約10㎝を測り、口縁部には自然釉が見られる。（44）は土師質の羽釜で、復元鍔径35.2㎝を測る。

斜面第２層　（第27・29図、図版29）

黄褐色細礫混土（第29図Ｂ－Ｂ′土色番号５・10・17、Ｃ－Ｃ′土色番号５・６）で遺物から見て13世紀以降の堆積と思われる。丘陵部の開発の様子から見て第２～６層と同年代の時期と推定できる。土師器土釜９点、東播系須恵器１点、瓦器６点、須恵器杯５点（６世紀後半～末４点、奈良時代１点）が出土した。図示できた主な遺物としては第27図（45・46）がある。（45）は須恵器甕の口縁部から肩部で、口径21㎝を測る。（46）も須恵器甕であるが、口径24㎝を測り、やや肩部が張るタイプである。



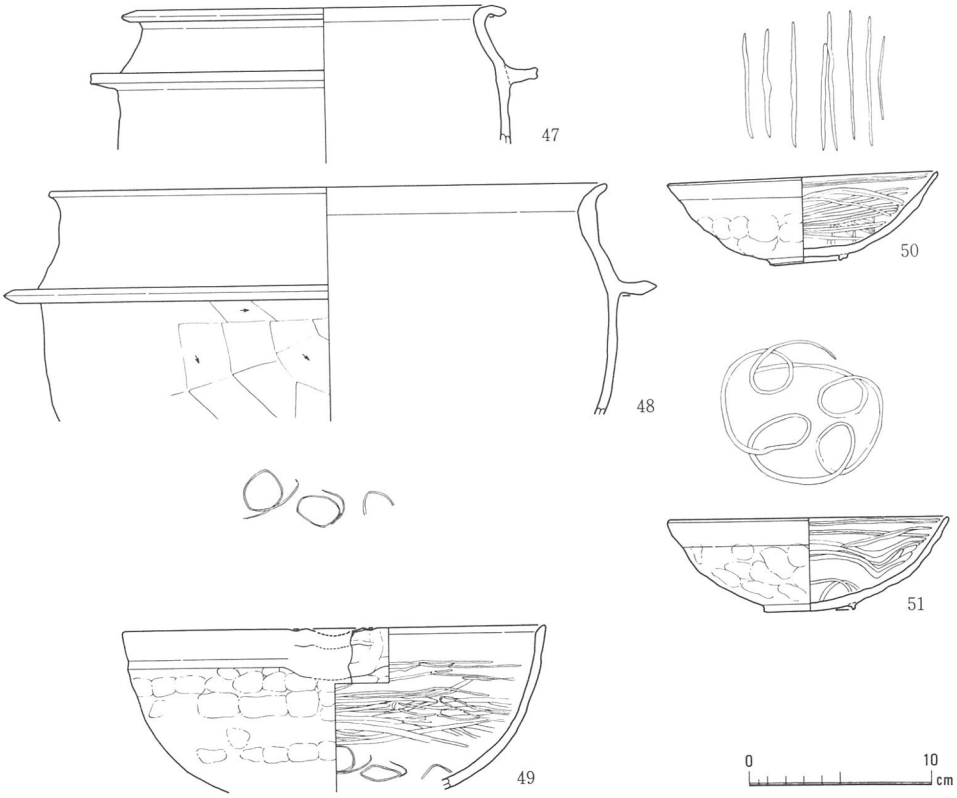

第27図　斜面第１・２層出土遺物（1/4）

斜面第３層　（第28・29図、図版30）

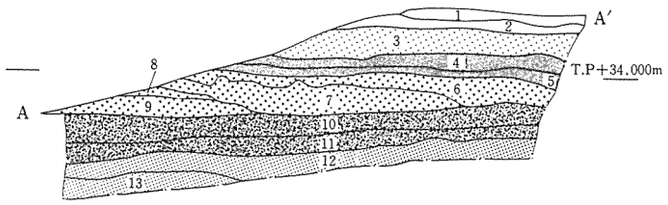
明黄褐色礫混粘質土（第29図Ｂ－Ｂ′土色番号９）で土師質土釜２点、東播系須恵器１点、瓦器碗４点が出土した。図示できた遺物としては第28図（47～51）がある。（47）は土師質の羽釜で復元口径20㎝、同鍔径24.4㎝を測る。（48）も土師質の羽釜で復元口径30㎝、同鍔径35.6㎝を測る。両方とも口縁部は内傾し端部は外側へ屈曲する。（49）は瓦質の片口鉢で、復元口径23㎝、残存器高8.8㎝を測る。（50・51）は瓦器碗で口径16㎝、器高4.6、5.6㎝、底径3.4、4.6㎝をそれぞれ測る。いずれも外面には指頭痕が見られ、内面には丁寧なヘラミガキが施され、見込みに並行線状暗文・連続輪状文の暗文が認められる。

斜面第４層　（第29図）

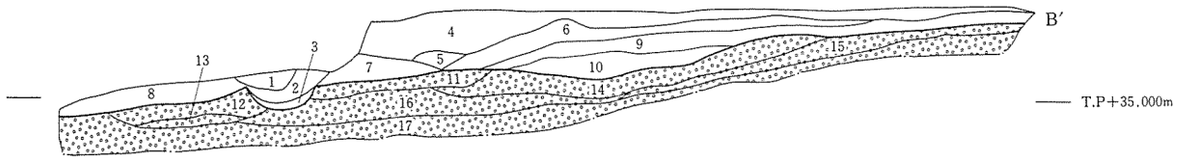
明黄褐色礫混砂質土（第29図Ｂ－Ｂ′土色番号10）で瓦、土師器、瓦器、須恵器などの細片を出土したが、図示できる遺物はなかった。



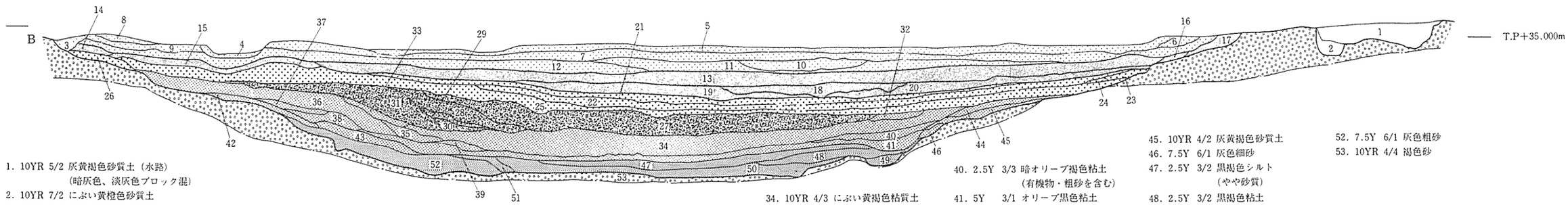

第28図　斜面第３層出土遺物（1/4）



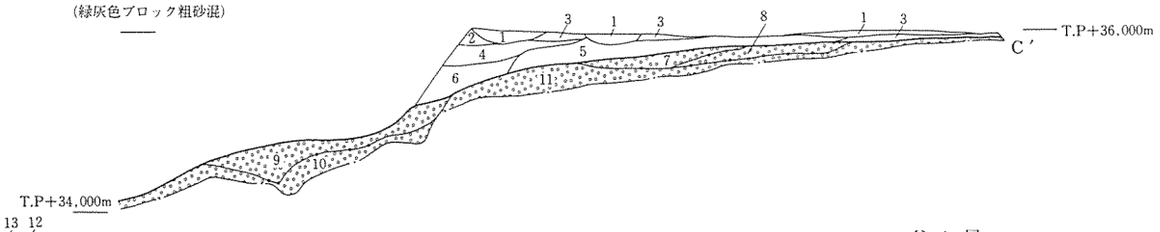

1. 現耕作土
2. 灰褐色土（床土）
3. 黄褐色土混青灰色粘質土
4. 黒褐色混青灰色粘質土
5. 黒灰色混青灰色砂質土
6. 黒灰色混暗灰色粘土
7. 暗青灰色土混暗褐灰色粘土（有機質を多く含む）
8. 暗黒灰色土混明青灰色粘土
9. 暗青灰色土混暗灰褐色粘土（有機質を多く含む）
10. 黒点混暗茶灰色粘質土
11. 明青灰色土混暗灰褐色粘土（有機質を多く含む）
12. 暗茶灰色粘質土
13. 明青灰色土混暗灰褐色粘土（有機質を多く含む）

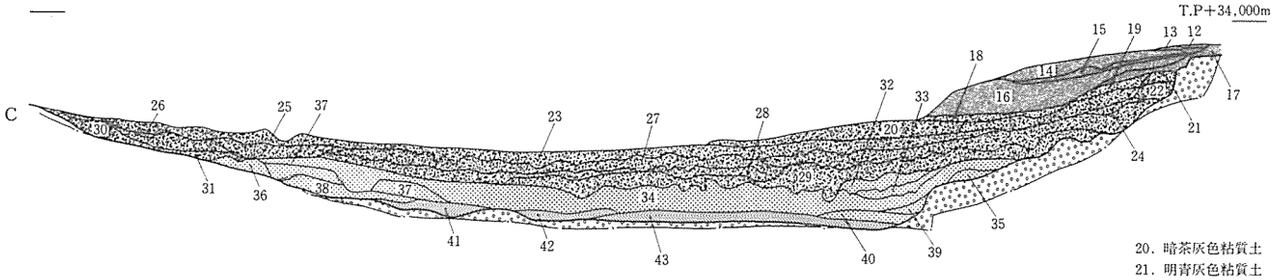



1. 10YR 3/2 黒褐色砂質土
2. 10Y R 6/2 灰黄褐色砂質土
3. 10YR 6/4 にぶい黄橙色砂質土
4. 10YR 6/8 明黄褐色礫混土
5. 10YR 5/8 黄褐色細礫混土
6. 10YR 5/6 黄褐色細礫混土
7. 10YR 6/8 明黄褐色土
8. 2.5Y 5/4 黄褐色砂質土
9. 10YR 6/6 明黄褐色礫混粘質土
10. 2.5Y 6/6 明黄褐色礫混土
11. 10YR 5/6 黄褐色粘質土
12. 2.5Y 6/6 明黄褐色細礫混砂質土
13. 2.5Y 6/4 にぶい黄色細礫混土
14. 10YR 6/6 明黄褐色粘質土
15. 10YR 5/8 黄褐色礫混粘質土
16. 2.5Y 6/6 明黄褐色礫混土（やや砂質）
17. 2.5Y 6/6 明黄褐色粘質土




1. 10YR 5/2 灰黄褐色砂質土（水路）（暗灰色、淡灰色ブロック混）
2. 10YR 7/2 にぶい黄橙色砂質土
3. 2.5Y 5/1 黄灰色砂質土（水路）
4. 2.5Y 5/4 黄褐色砂質土
5. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土
6. 2.5Y 6/2 黄灰色礫混砂質土
7. 7.5YR7/1 明褐灰色粘質土
8. 2.5Y 5/3 オリーブ褐色砂質土
9. 5Y 5/1 灰色シルト
10. 2.5Y 7/2 灰黄色粘質土（黄褐色ブロック土混）
11. 2.5Y 6/2 灰黄色粘土
12. 10YR 5/2 灰黄色粘土
13. 2.5Y 5/3 黄褐色粘土
14. 2.5Y 5/2 暗灰黄色粗砂混土
15. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土
16. 5YR 5/2 褐灰色砂質土
17. 10YR 6/2 灰黄褐色砂質土
18. 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂礫土（粘土ブロック混）
19. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土（有機物を多く含む）
20. 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土（有機物を多く含む）
21. 10YR 2/3 黒褐色粘質土（有機物を多く含む）
22. 10YR 2/3 黒褐色粘土（有機物を多く含む）
23. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粗砂（粘土ブロック混）
24. 10YR 4/4 褐色シルト
25. 10YR 5/2 灰黄褐色粘土
26. 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂礫土
27. 2.5Y 3/2 黒褐色シルト
28. 2.5Y 5/3 黄褐色土
29. 10YR 4/4 褐色シルト（砂層を含む）
30. 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
31. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土（粗砂・礫を含む）
32. 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト
33. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂（シルト・粘土・ブロック混）
34. 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質土
35. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘質土
36. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質土（粗砂・礫を含む）
37. 2.5Y 6/3 黄褐色砂質土
36. 10YR 2/3 黒褐色粗砂
39. 10YR 3/2 黒褐色粘土（緑灰色ブロック粗砂混）
40. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘土（有機物・粗砂を含む）
41. 5Y 3/1 オリーブ黒色粘土（有機物を多く含む）
42. 2.5Y 6/2 灰黄色粗砂
43. 2.5Y 3/1 黒褐色砂質土（1cmぐらいの礫を含む）
44. 2.5Y 7/3 浅黄色砂（粗砂を含む）
45. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土
46. 7.5Y 6/1 灰色細砂
47. 2.5Y 3/2 黒褐色シルト（やや砂質）
48. 2.5Y 3/2 黒褐色粘土
49. 5Y 5/3 灰オリーブ細砂
50. 5YR 2/1 黒褐色粘土（有機物を多く含む）
51. 2.5Y 3/2 黒褐色砂（細砂・シルト混）
52. 7.5Y 6/1 灰色粗砂
53. 10YR 4/4 褐色砂




1. 耕作土
2. 明黄褐色土
3. 床土（淡黄色粘質土）
4. 明黄色土混淡褐色礫土
5. 赤褐色土混淡灰色砂質土
6. 淡灰色礫混土
7. 暗黄褐色砂質土
8. 黄褐色砂質土
9. 淡灰色ブロック混黄褐色礫（暗灰色細礫を含む）
10. 黄褐色礫混土
11. 黄褐色礫混土（礫を多く含む）
12. 黄白色砂
13. 暗黄灰色砂
14. 暗緑灰色土
15. 黄白色砂（中砂を多く含む）
16. 暗緑灰色土混暗茶灰色粘質土
17. 暗青灰色砂
18. 暗緑灰色土混淡茶灰色粘質土
19. 暗青灰色粘質土
20. 暗茶灰色粘質土
21. 明青灰色粘質土
22. 青灰色粘質土（有機物を多く含む）
23. 暗灰色粘土
24. 黒灰色土（有機物を多く含む）
25. 明青灰色粘質土混暗黒灰色粘質土（有機物を多く含む）
26. 暗灰色粘土混暗黒灰色粘質土
27. 暗黒灰色粘土（有機物を多く含む）
28. 明灰色粘質土
29. 緑灰色粘質土混黒灰色粘質土
30. 明緑灰色礫混暗灰色礫
31. 暗灰色粘質土
32. 緑灰色粘質土混黒色粘質土（有機物を多く含む）
33. 緑灰色粘質土混暗茶灰色粘質土（有機物を多く含む）
34. 黒灰色粘質土（有機物を多く含む）
35. 緑灰色粘質土（有機物を多く含む）
36. 暗緑灰色粘質土混黒色粘質土
37. 暗赤灰色粘質土（有機物を多く含む）
38. 暗緑灰色砂質土
39. 緑灰色粘質土混灰色砂
40. 黒色粘質土混灰色砂
41. 黒色粘質土（有機物を多く含む）
42. 黒色粘質土（有機物・中砂を多く含む）
43. 灰色砂

谷 1 層
谷 2 層
谷 3 層
谷 4 A 層
谷 4 B 層
谷 5 層
最 終 面

0 4 m

第29図　自然流路及び周辺断面図（1/80）

## Ⅲ．自然流路

自然流路は調査区内の北東側を東～西方向に流れるように検出された。流路はやや蛇行するように調査区内を流れ、南側の方が広く侵食されているため、流れが当たる部分ではないかと思われる。調査では流路内の土層を大きく６層に分類することができた。以下に分類できた土層と遺物を示す。

### 自然流路第１層　（第29図、図版25）

解析谷をため池にする際の整地土（第29図中央土色番号１～12）である。出土遺物は染付を含み、陶磁器は９点、瓦14点（外面縄目タタキ３点、内面布目痕２点、他に内面斜め方向の木引痕が見られるもの）、土師質土釜10点、東播系須恵器こね鉢３点、備前焼すり鉢、常滑焼甕、瓦器５点である。須恵器については杯が２点（飛鳥～奈良時代）、甕２点、壺５点、瓶子１点である。

そのほか土師器高杯１点と円筒埴輪３点などがある。

### 自然流路第２層　（第29図、図版25）

流路内の中心より南側に厚く堆積する土層（第29図中央土色番号13～20）である。遺物の出土はあまりなく、明確な時期は不明であるが層的に見て近世の整地土もしくは堆積土ではないかと思われる。

出土遺物は瓦２点、常滑焼甕４点、土師質土釜４点、瓦器５点である。須恵器については古墳～奈良時代と思われる杯の破片の他、甕６点（内面同心円タタキ４点）、短頸壺３点である。

### 自然流路第３層　（第29図、図版25）

比較的安定した堆積状況の土層（第29図中央土色番号21～26）である。中世の堆積層と思われるが、中世後期まで下る可能性もある。出土遺物は瓦器片41点、土師質土釜２点、須恵器については甕６点（内面同心円タタキ１点）、杯６点（内５世紀１点、６世紀中葉２点、６世紀末２点、飛鳥時代１点）、瓶２点、器台１点などがある。

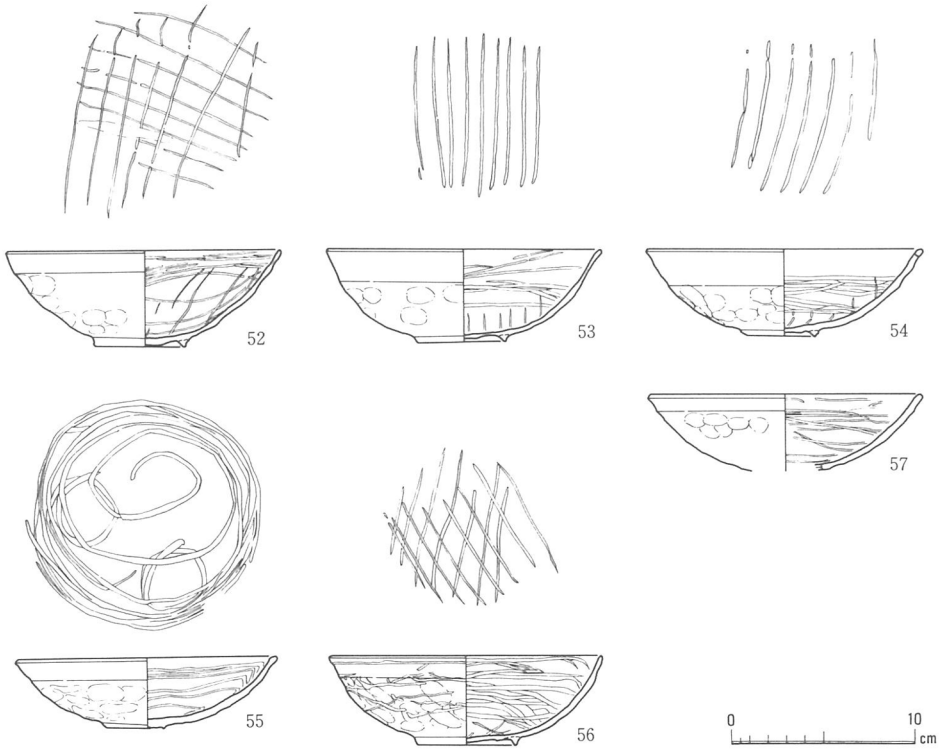
### 自然流路第４Ａ層　（第29・30図、図版25・30）

第４層は有機物を多く含む中世の自然堆積層（第29図中央土色番号27～31）である。こ

の第４層は堆積状況の違いから大きく分けるとＡ層・Ｂ層の２層に分類できる。上部のＡ層は砂を多く含み、下部のＢ層は粘土質を多く含む層である。

出土遺物としては瓦器13点、東播系こね鉢２点、土師器皿２点、瓦５点（丸瓦４点）、常滑焼２点、玉縁白磁１点、布留甕１点などがある。須恵器については甕４点、高杯３点（長脚２段スカシ２点、短脚円形スカシ１点）、器台２点、土師質土釜３点などがある。

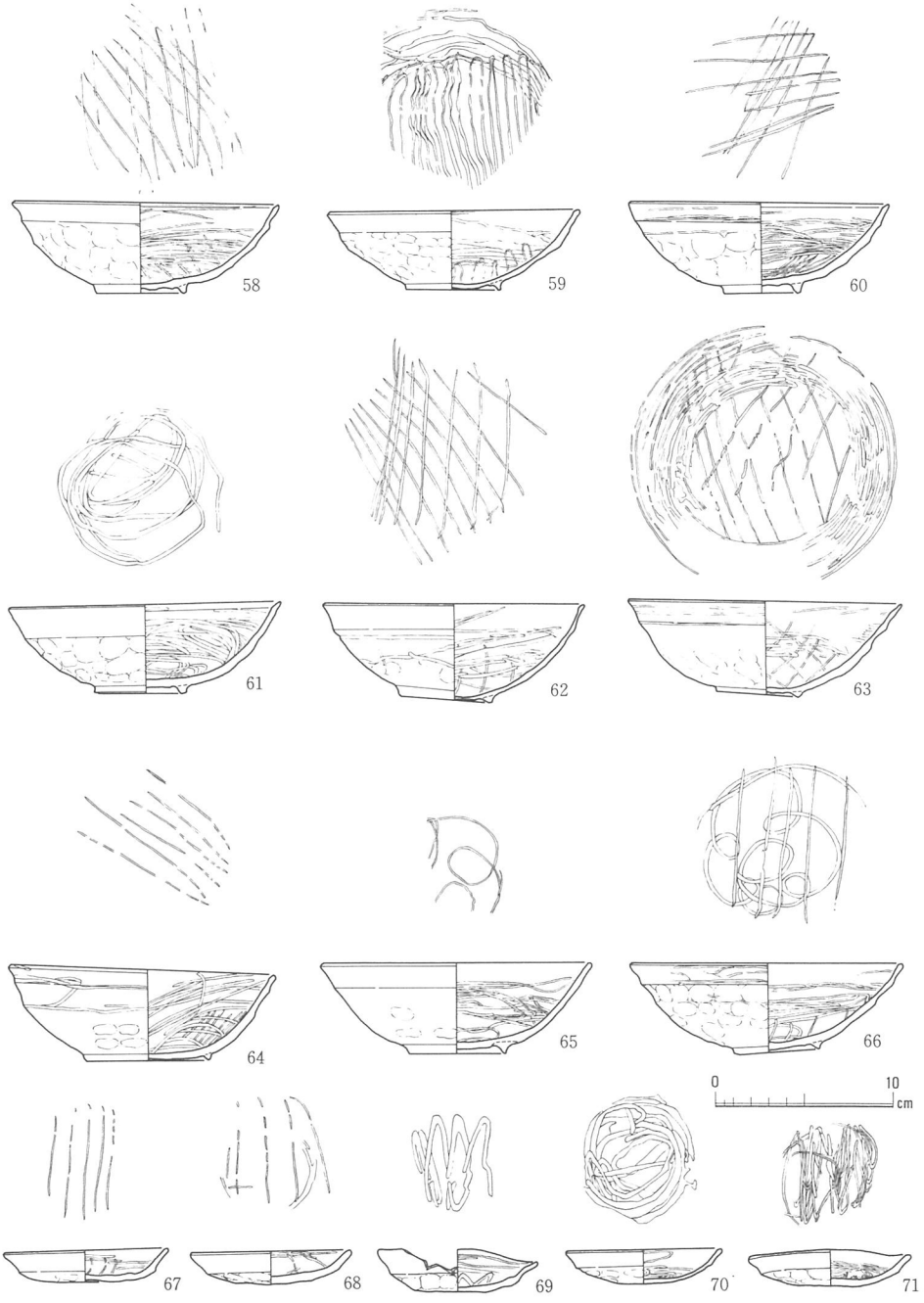
この第４Ａ層で図示できた主な遺物としては第30図（52～57）がある。（52～57）は瓦器碗である。（52）は口径14.8㎝、器高6.2㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には格子状暗文が見られる。（53）は口径14.8㎝、器高５㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には細かい並行線状の暗文が見られる。（54）は口径15㎝、器高4.8㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には並行線状の暗文が見られる。（55）は口径14.7㎝、器高5.1㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には斜格子状の暗文を施す。（56）は口径14㎝、器高3.8㎝を測る。外面には粗略な暗文と指頭痕が見られ、底部内面にはやや太めの渦巻き状の暗文が見られる。（57）は口径14.8㎝、残存器高4.5㎝を測る。




第30図　自然流路第４Ａ層出土遺物（1/4）

外面には指頭痕が見られ、内面には粗いヘラミガキが見られる。

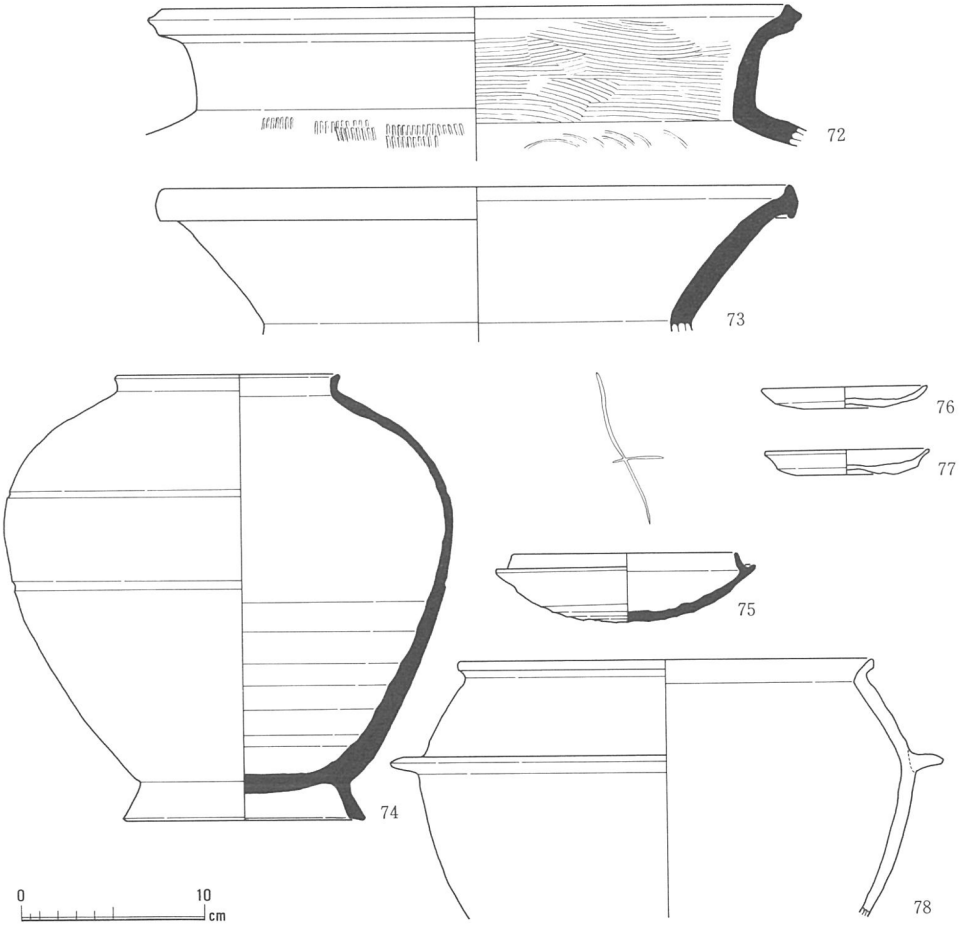
**自然流路第４Ｂ層**　（第29・31・32図、図版25・31・32）




第31図　自然流路第４Ｂ層出土遺物（1/4）

第４Ｂ層（第29図中央土色番号32～46）は下部に有機物を多く含み、13世紀代の遺物を多く含む堆積層である。出土遺物としては瓦器59点、陶器１点、土師質土釜３点、須恵器甕４点（内面同心円タタキ１点）、器台１点、壺１点、５世紀代の杯１点、土師器甕１点、円筒埴輪片１点などがある。図示できた主な遺物としては第31・32図（58～78）などがある。（58～66）は瓦器碗である。

（58）は口径14.8㎝、器高５㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には斜格子状暗文が見られる。（59）は復元口径14㎝、器高4.5㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には流水文状に暗文を施している。（60）は口径14.4㎝、器高５㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には並行線状の暗文と丁寧なミガキが見られる。（61）は口径15㎝、器高５㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面にはやや太めの連続輪状文




第32図　自然流路第４Ｂ層出土遺物２（1/4）

の暗文が見られる。(62) は口径14.4㎝、器高5.3㎝を測る。外面には指頭痕と粗略な暗文が見られ、底部内面にはやや斜めの格子状の暗文が見られる。(63) は口径15.4㎝、器高5.2㎝を測る。外面には指頭痕と暗文が見られ、底部内面には斜格子状の暗文が見られる。(64) は口径14.7㎝、器高5.4㎝を測る。外面には指頭痕が見られるがナデ消されている部分が多く、底部内面には並行線状の暗文が見られる。(65) は復元口径15㎝、器高5.1㎝を測り、底部内面には連続輪状の暗文が見られる。(66) は口径15.1㎝、器高5㎝を測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面には連続輪状文の後に並行線状の暗文を施す。

(67～71) は瓦器小皿である。(67) は口径9.2㎝、器高1.9㎝を測る。底部内面には並行線状の暗文が見られる。(68) は口径8.9㎝、器高1.8㎝を測る。外面には指頭痕と重ね焼き痕が見られ、底部内面には流水文状の暗文が見られる。また、板状工具によるナデも観察された。(69) は口径8.7㎝、器高2.4㎝を測る。底部内面にはジグザグ状の暗文が見られる。(70) は口径8.7㎝、器高1.9㎝を測る。底部内面には渦巻き状の暗文が見られる。(71) は口径9.2㎝、器高2㎝を測る。外面には指頭痕と重ね焼き痕が見られ、底部内面には渦巻き状暗文の後に並行線状の暗文を施しているのが見られる。

第32図 (72・73) は須恵器の甕である。(72) は口径35.6㎝を測り、(73) は口径35㎝で外面に自然釉が一部見られる。(74) は須恵器の短頸壺で復元口径12㎝、器高24.1㎝、底径12.8㎝を測る。口縁部は基部よりほぼ直立する。(75) は須恵器の杯身で口径12㎝、器高3.8㎝を測る。ロクロ回転は時計回りで、底部外面にヘラ記号をもつ。(76・77) は土師質の小皿で口径9㎝、器高1.3㎝をそれぞれ測る。底部には粗い指頭痕が見られる。(78) は土師質の羽釜で復元口径22.6㎝、同鍔径30.2㎝、残存器高9.8㎝を測る。内・外面とも剝離のため調整は不明であるが、外面全体に煤が付着しているのが観察された。

### 自然流路第5層　(第29図、図版25)

自然流路第5層 (第29図中央土層番号47～52) はわき水が多くうまく分層できず、この第5層の時期を決める遺物は出土しなかったが、おそらく古墳時代～中世前期に至る堆積層と考えられる。

## Ⅳ. その他の包含層の遺物　(第34図)

その他の包含層の遺物としては自然流路の肩部で出土 (第33図79・80) したものと、整地土内より出土した石器 (第34図81～84) がある。

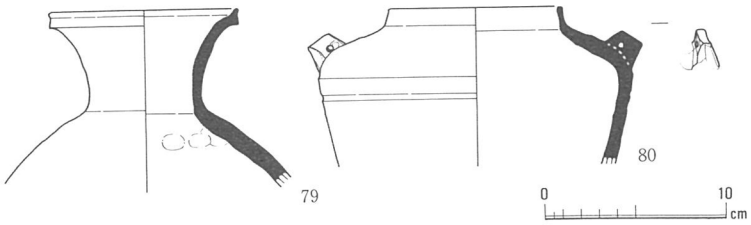
**自然流路北側肩部**　（第29・33図、図版25・33）

今回の調査では北側の肩部で遺物が出土したが、出土遺物は少なく、なだらかな肩部に刺さるようにして出土している。第33図（79）は須恵器の壺で復元口径10.2㎝、残存器高9.8㎝を測る。外面には自然釉が見られる。（80）は須恵器の把手付きの短頸壺で、復元口径9.6㎝、残存器高8.6㎝を測る。短頸壺の肩部分に把手をナデ付けた後に面をつけるための削り痕が見られる。

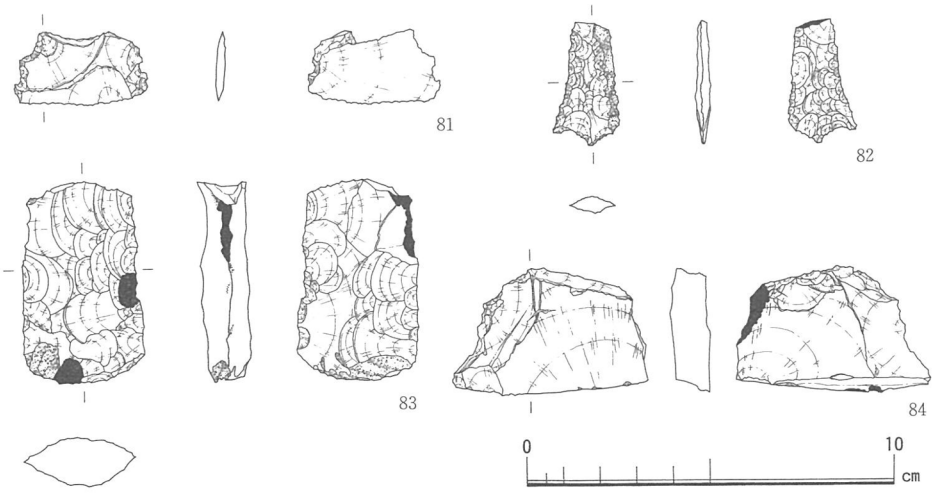
**石器**　（第24・34図、図版33）

包含層出土の石器は第３・４層の整地土内より出土した（第34図81～84）。

（82・83）は第３層よりの出土である。（82）は有舌尖頭器で長さ3.4㎝、重さ2.6ｇを測る。（83）は打製石剣もしくは石槍と思われ、長さ約5.5㎝、幅約３㎝、重さ33.2ｇを測る。（81・84）は第４層より出土した。一部に原礫面を残す横長剝片である。（81）は長さ約２㎝、幅約3.6㎝を測る。（84）は長さ約3.5㎝、幅約5.5㎝を測る。




第33図　自然流路北側肩部出土遺物（1/4）




第34図　包含層出土石器（1/2）

## 第３項　遺構と遺物

### Ⅰ．古墳時代後期

1001－ＯＧ　（第23・35～42図、図版11・12・34～36）

栂丘陵の先端部の高所に位置する古墳である。過去の発掘調査で検出された野々井古墳群に続く尾根上に当たる。標高はT.P約36.0mである。

1001－ＯＧの墳丘上部は中世の耕作などによって削平されているため、墳形及び規模は必ずしも明確でない。墳形については当初、耕作面（周溝推定部分）の西側に隆起が認められたため前方後円墳の可能性が示唆された。しかし、土層からみて西側の隆起は墳丘流失土と考えられることや隆起の南側が大きく南に向かって延び整然とならないことなどから、径約17mの円墳と推定される。古墳は道路建設の際に削平されるので、確認のため十

第35図　古墳時代主要遺構配置図（1/800）

字方向のトレンチを設定し最終的にセクションを残し土層観察をしながらマウンド部分の掘削を行ったが、墳丘築造の方法については上部盛土の有無は確認できなかった。しかし、周溝推定部分の地形や土層の観察から、墳丘全体が盛土で構成されていたのではなく地山を成形した墳丘であることがわかった。

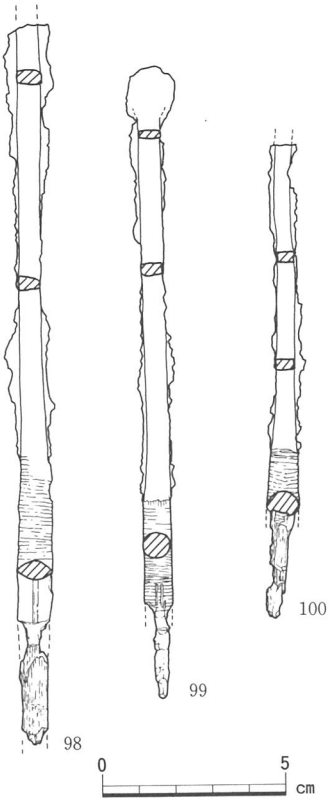
また、周溝推定部分には古墳時代の単純層の存在は確認されず、これは中世の耕作によって古墳時代の堆積層が撹乱を受けているためと思われる。

古墳の立地を考えると規模は多少改変されてはいるが、堀り割り地形は当初のものを踏襲しているものと思われ、東側に幅９～11ｍの周溝を有するものと推定される。

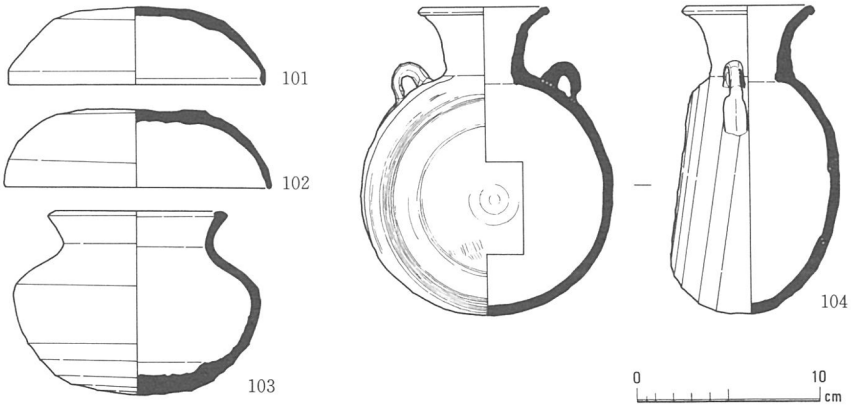
古墳の南～西側にかけては、古墳を作った当時の地形を有しているとは考えられず、周溝の規模は不明である。

墳丘西裾で上部を削平された墓壙を検出した。（第38・40図）

墓壙の長さ約3.8ｍ、幅約1.8ｍを測るが、西側は

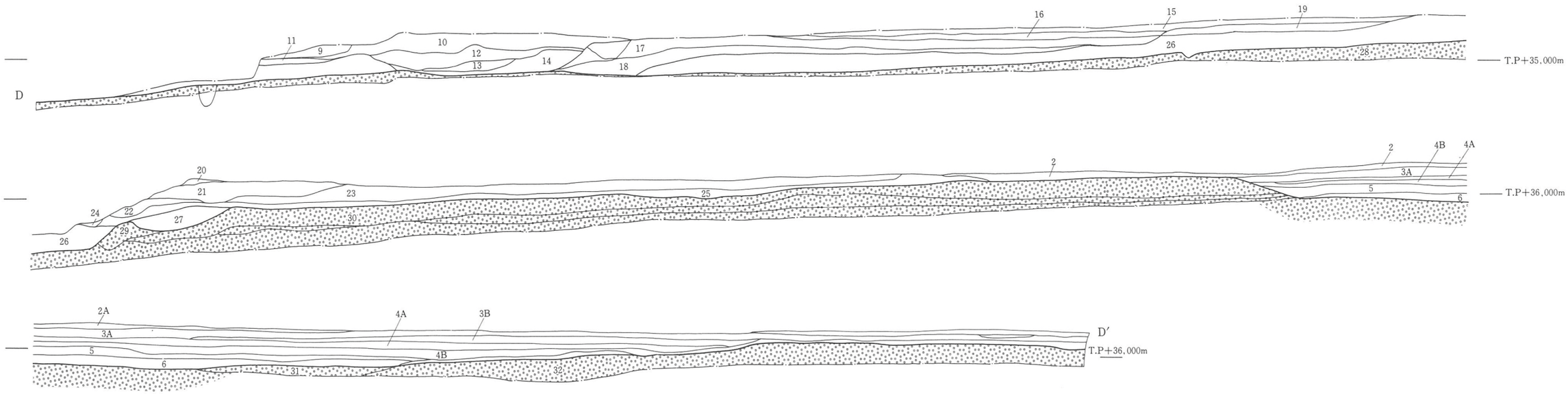



第36図　1001－ＯＧ
主体部出土鉄器（1/2）

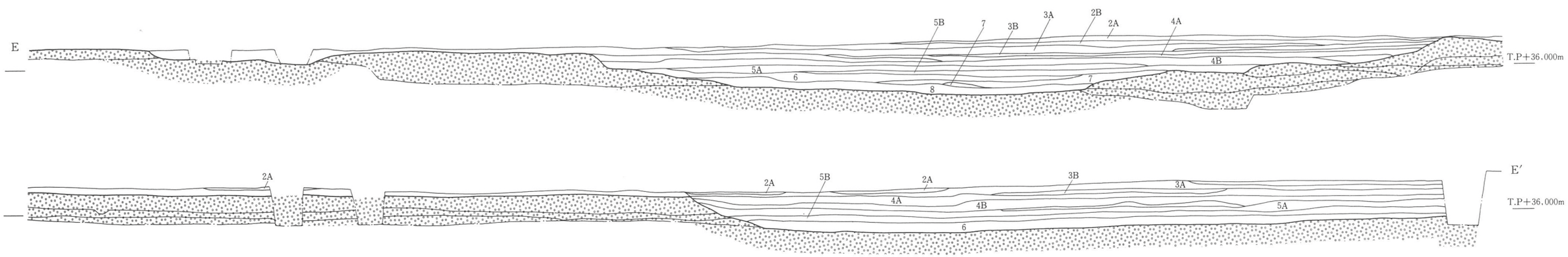



第37図　1001－ＯＧ主体部出土遺物（1/4）

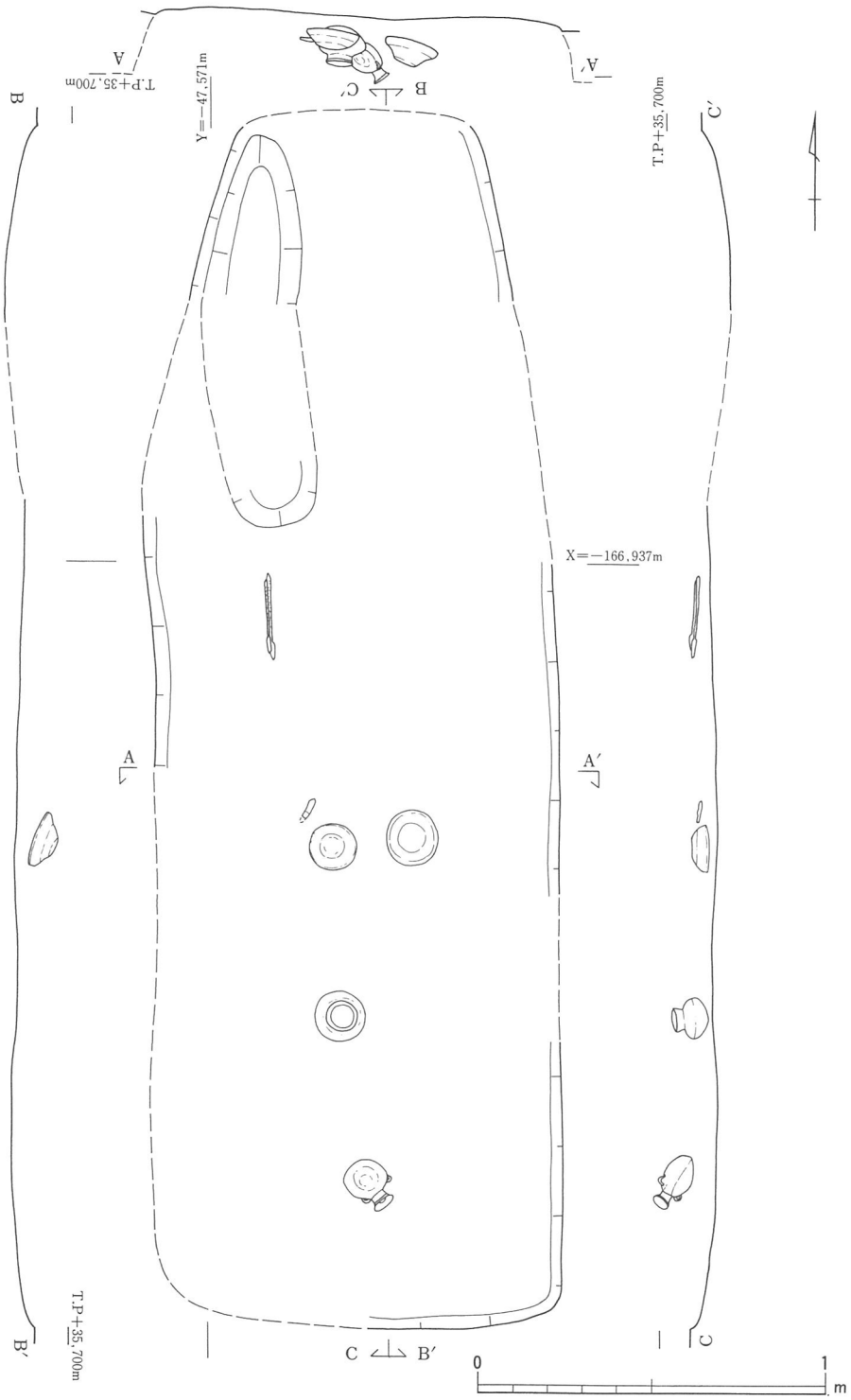
第38図　1001－ＯＧ墳丘平面図（1/100）




1. 耕作土
2A. 橙色混淡灰色土
2B. 淡灰色混橙色砂質土
3A. 褐色混淡灰色砂質土
3B. 淡灰色混黄褐色砂質土
4A. 淡灰色砂質土（橙色混）
4B. 黄褐色砂質土（灰色混）
5A. 橙色混淡灰色砂質土
5B. 灰色砂質土（橙色混）
6A. 淡灰色砂質土（橙色茶色点混）
6B. 暗灰色砂質土（茶点混）
7. 橙色砂質土
8. 暗灰色混黄褐色砂質土
9. 淡橙色土
10. 橙色粘質土
11. 淡灰色砂質土
12. 灰色粘質土ブロック混黄色粘質土
13. 灰色粘質土
14. 淡灰色砂質土
15. 黄色砂質土
16. 黄色砂質土混淡灰色砂質土
17. 黄色砂質土混灰色砂質土
18. 橙色混暗灰色粘質土
19. 黄褐色粘質土
溝埋土
20. 淡灰色土混黄色土
21. 橙色点混淡灰色砂質土
22. 橙色土混灰色土
23. 淡灰色土混黄褐色土
24. 淡黒色土（耕作土）
25. 暗灰色土
26. 灰色砂質土混橙色砂質土混淡黄色土
27. 白色混黄褐色土〔古墳（1001-OG）埋土〕
28. 黄褐色礫混土
29. 淡黄褐色砂質土
30. 黄褐色砂質土
31. 淡黄褐色砂質土
32. 黄褐色粘質土




第39図　1001－ＯＧ墳丘断面図（1/60）



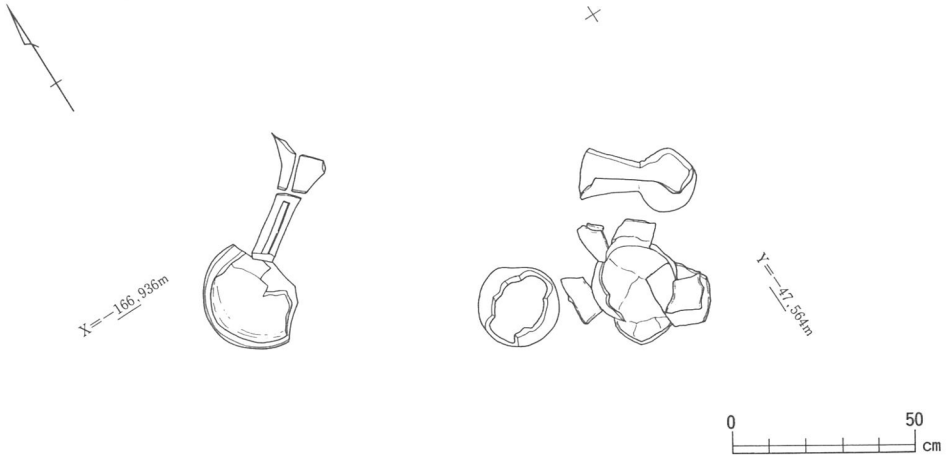

第40図　1001－ＯＧ主体部平面・立面図（1/20）

削平が著しく検出は困難であった。

棺は確認できなかったが、組み合わせの木棺を直葬していたと考えられる。埋葬位置は土壙のどの部分かは明確ではないが、鉄鏃の刃部の方向などから推定して頭位は南向きではないかと考えられる。本来の墓壙の深さは上面を削平されていたため不明であるが、平均で10㎝前後を確認できた。

遺物としては墓壙の南半分から須恵器提瓶１点、短頸壺１点、杯身２点、長頸鉄鏃３本、刀子片と思われる物が１点出土した。（第36・37図、98～104）

第36図（98～100）は長頸鉄鏃である。（98）は残存長19.6㎝を測るが、鏃身の部分は欠損する。茎には矢柄の木質と樹皮が見られる。（99）は残存長17.2㎝を測る。鏃身の形状から柳葉鏃ではないかと思われる。茎には矢柄の木質が微かに残り、この木質を巻くように樹皮が残っている。（100）は残存長13㎝を測るが、鏃身の部分は欠損する。茎には矢柄の木質が見られ樹皮が木質を巻くように残っている。その他、刀子（図版35－167）が出土している。第37図（101～104）は主体部内より出土の須恵器である。（101・102）は須恵器の杯蓋である。（101）は口径13.8㎝、器高4.3㎝を測る。回転ヘラケズリが見られるが、細部の調整については表面剝離が著しいため不明である。（102）は口径14.5㎝、器高4.2㎝を測る。天井部の回転ヘラケズリの範囲は広く、時計回りのロクロ回転が認められた。（103）は須恵器の短頸壺で口径９㎝、器高10㎝を測る。外面には回転ナデ調整が見られ、外面底部には回転ヘラケズリ調整が見られる。ロクロの回転方向は時計回りである。（104）は須恵器の提瓶で口径6.7㎝、器高16.8㎝を測る。肩部には輪状で左右一対の把手




第41図　1001－ＯＧ墳丘上部遺物出土状況（1/20）

を持ち、側面の一方は平面で下部を外側に張り出す形状である。

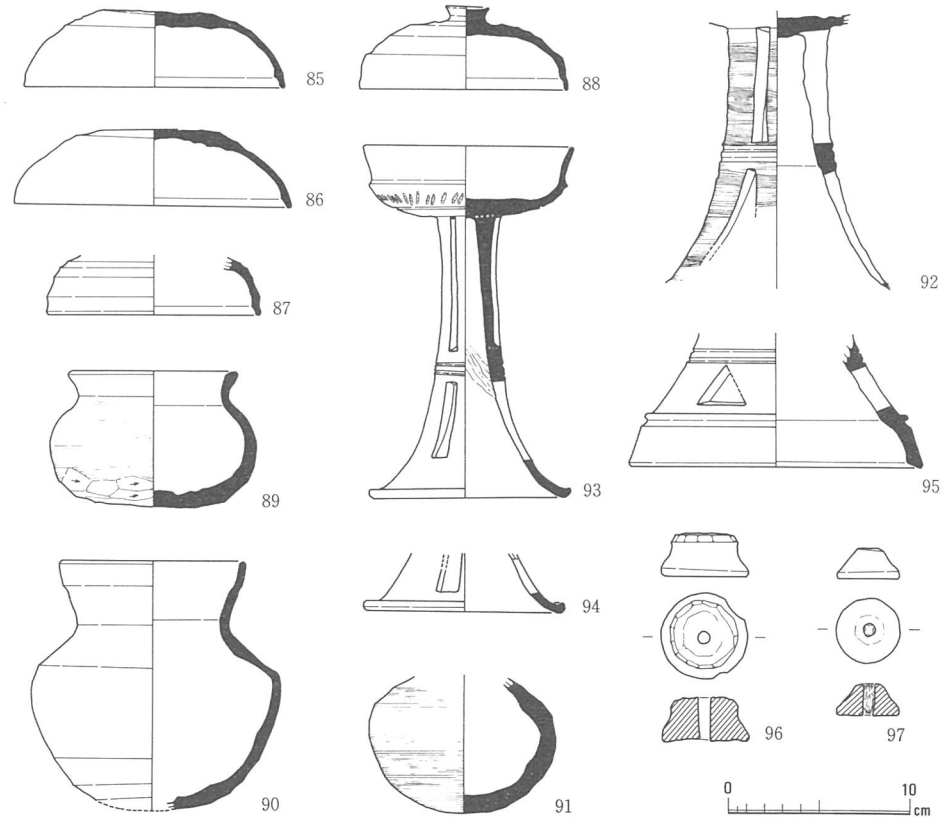
1001－ＯＧの墳丘上には暗褐灰色土（旧地表面もしくは耕作面）の整地土が見られる。この整地土の上層の黄褐色土を掘削中に土器の集積（第41図）が見られた。

出土遺物としては土師器壺２点、須恵器高杯１点、短頸壺１点がある。これらの土器の集積は当初、墳丘盛土から掘り込まれた墓壙を平面的に確認できず掘削しすぎたと考えられた。しかし、断面で墓壙の掘り方を確認できず、平面でも痕跡を確認できなかった。土器の摩滅も顕著なため墳丘が削平された段階に移動したものと推定できる。

そのほか古墳に伴うと思われる遺物の出土地点は分散しているが須恵器杯蓋、短頸壺、高杯、紡錘車などが出土している。

中心主体部は周辺から石材も出土していないため木棺直葬の可能性が高いと思われる。

出土遺物としては第42図（85～97）がある。（85～87）は須恵器杯蓋である。（85）は口径14.1㎝、器高4.2㎝を測る。天井部の中心は未調整であるが、時計回りの回転ヘラケズ




第42図　1001－ＯＧ墳丘内出土遺物（1/4）

リが見られる。(86) は口径15.2㎝、器高4.1㎝を測る。(87) は復元口径11.4㎝を測る。(88) は高杯蓋で口径11.4㎝、器高4.5㎝を測る。天井部の外面中央部につまみをもつ。

(89～91) は須恵器の壺である。(89) は短頸壺で口径8.6㎝、器高7.3㎝を測る。底部外面には静止ヘラケズリ調整が見られる。(90) は復元口径10㎝、同器高13.6㎝を測る壺である。外面は回転ナデ調整が見られ、底部外面は回転ヘラケズリである。(91) は口縁部が欠損するため口径・器高は不明である。残存器高7.3㎝を測る。外面は剝離が著しいが、1㎝に4～11本のカキ目が見られる。焼成は軟質である。

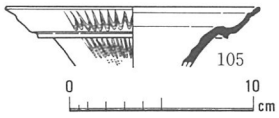
(92～94) は須恵器の高杯である。(92) は高杯の脚部で残存器高14.8㎝を測る。脚部の中央部に2条の沈線をめぐらし、沈線をはさんで2段3方向の長方形スカシを付ける。

(93) は無蓋高坏で口径11.2㎝、器高19.3㎝、脚底径10.3㎝を測る。杯の外面には刺突文がめぐる。脚部は中央部に2条の沈線をめぐらし、沈線をはさんで2段3方向の長方形スカシを付ける。(94) は高杯の脚部で残存器高3.2㎝、脚底径10.6㎝を測る。3方向の長方形スカシを付ける。(95) は須恵器の器台脚部で残存器高7.2㎝、脚底径15.8㎝を測る。下段に三角形のスカシを付ける。

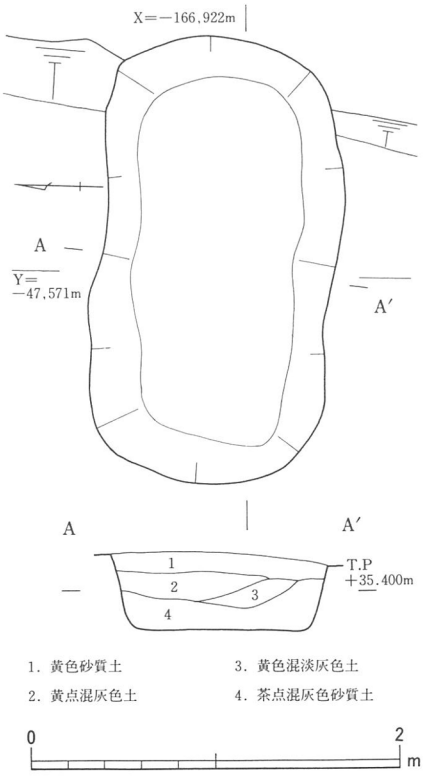
(96•97) は紡錘車である。(96) は須恵器の紡錘車で高さ2.4㎝、上端径3.5㎝、下端径4.9㎝、重さ34ｇを測る。上端部はヘラで面取りが行われている。(97) は滑石製の紡錘車で高さ1.8㎝、上端径1.5㎝、下端径3.5㎝、重さ25.4ｇを測る。穿孔された穴の内側には木質が認められた。

1002－ＯＯ　(第23・35・43・44図、図版13・37)

1001－ＯＧの北東で丘陵部微高地上に位置する。西側の上部は耕作に伴い削平されている。平面形は隅丸方形を呈し、長辺約2.4m、短辺約1.3m、深さは0.6m前後を測る。




第44図　1002－ＯＯ出土遺物 (1/4)



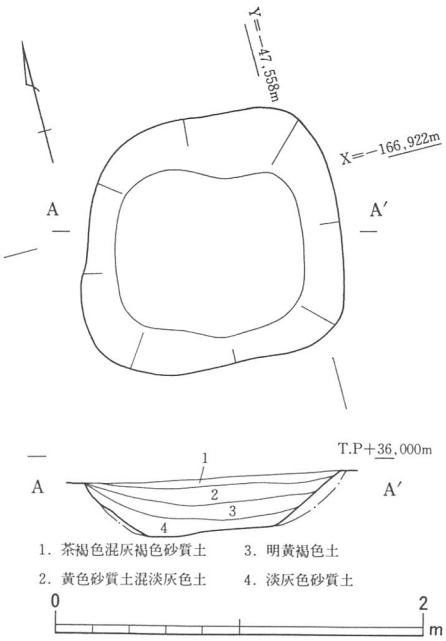

第43図　1002－ＯＯ平面・断面図 (1/40)

遺物としては土師器片のほか須恵器の細片が数点出土した。出土した遺物の中には6世紀後半にさかのぼる可能性のものもある。

図示できた出土遺物としては第44図（105）がある。（105）は須恵器甕の口縁部で、復元口径13.9㎝、残存器高3.2㎝を測る。

1003－ＯＯ　（第23・35・45図、図版13）

1001－ＯＧの東側で丘陵部微高地上に位置する。一辺約1.3mの隅丸方形を呈する。断面形状はＵ字状で深さは約0.3mである。埋土は細かくみると4層に分けられるが、上2層と下2層の間に暗黒褐色土が薄く見られる。これは土坑が完全に埋まるまでに若干の時期差があると思われる。



第45図　1003－ＯＯ平面・断面図（1/40）

出土遺物としては須恵器の細片のみで長脚高杯の脚部と思われるものが1点、壺の破片が2点で、図示できるものはなかった。

土坑の時期は、出土遺物などから1002－ＯＯと同じ6世紀後半にさかのぼる可能性がある。

## II．鎌倉時代

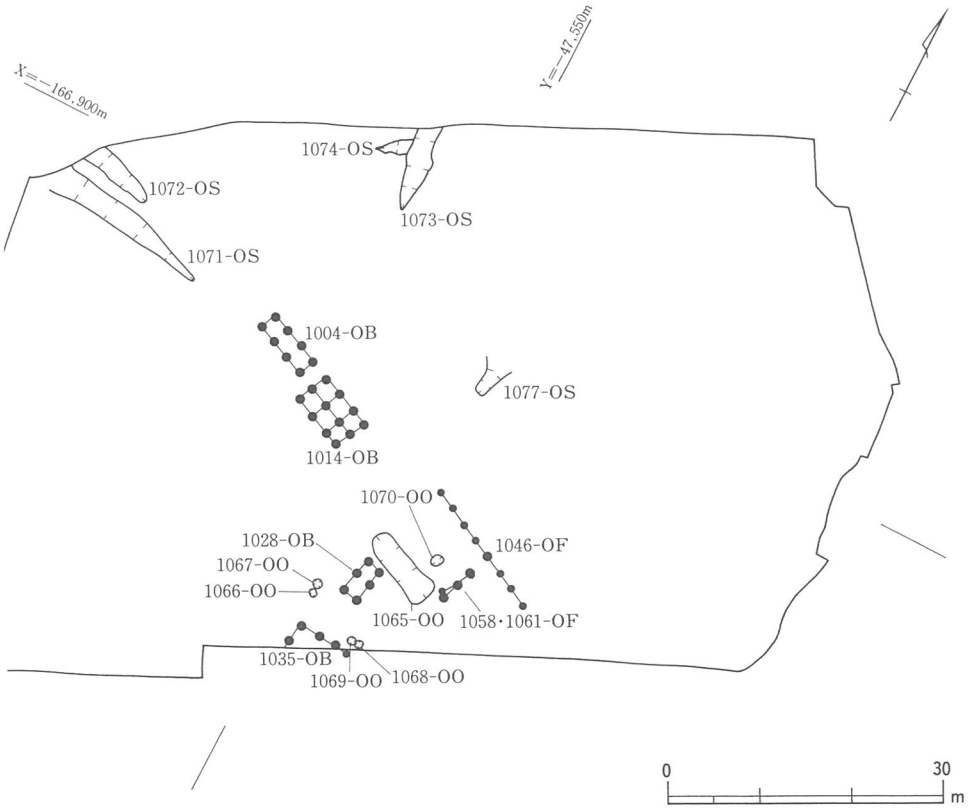
鎌倉時代の遺構は、調査区のほぼ中央部で検出され、東西方向に連なるようにして掘立柱建物跡・柵列・土坑・溝などがある。

### 1004－ＯＢ　（第23・46・47図、図版14）

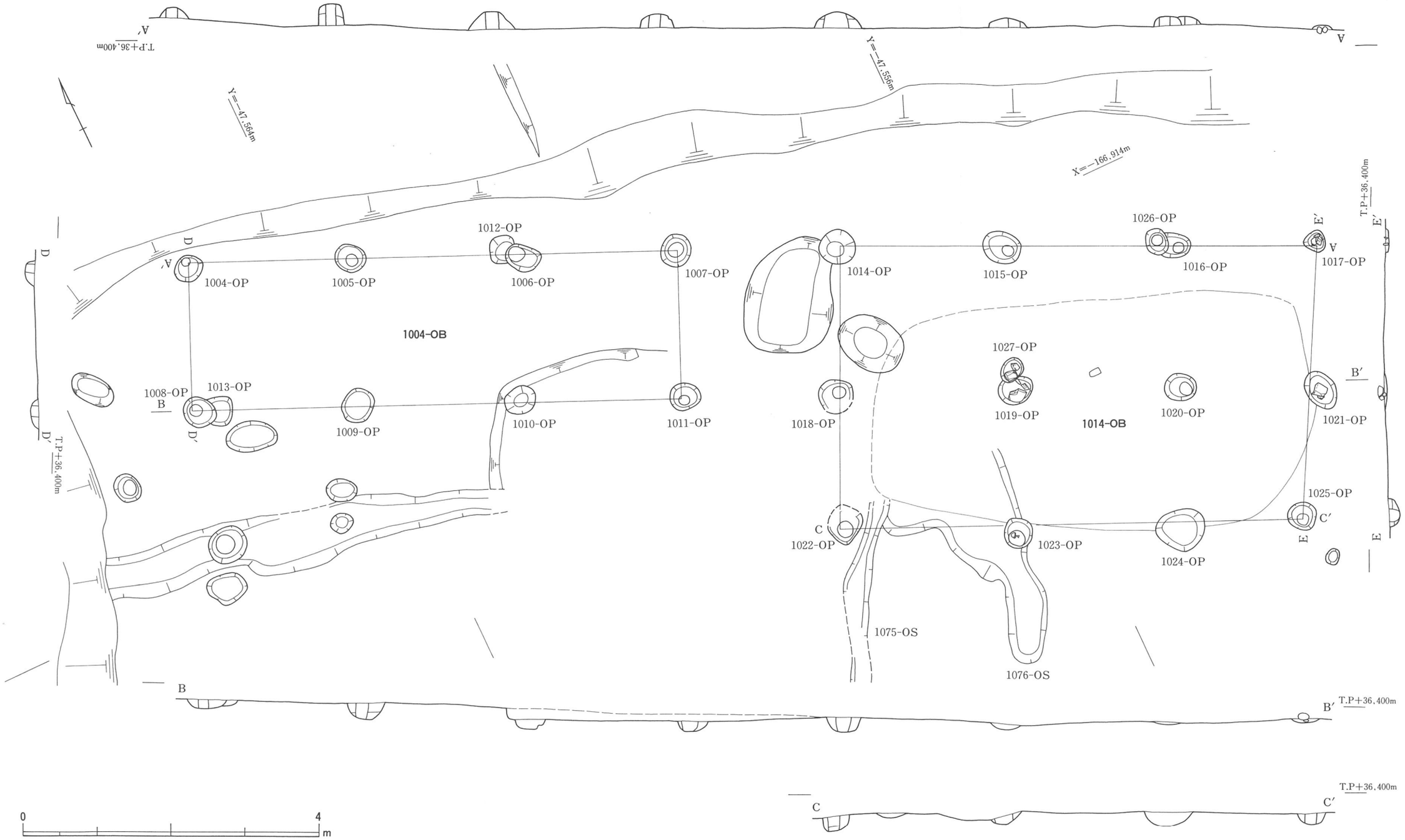
調査区ほぼ中央部で、丘陵先端部やや北側に位置した掘立柱建物跡である。標高はT.P約36.2mである。1004～1011－ＯＰで構成されている。

建物跡は１間×３間のもので、規模は6.5m×2.0m、面積約13㎡を測る。柱穴間の距離は桁行2.1～2.2m、梁行２m前後である。方向はＮ－65°－Wを示す。柱穴は隅丸方形で径0.4m前後、深さ約0.15～0.30mである。

また、柱痕跡は６つ検出することができ、埋土は灰色砂質土および黄褐色土混灰色砂質




第46図　鎌倉時代主要遺構配置図（1/800）




第47図　1004・1014－ＯＢ平面・断面図（1/60）